
バカとテストと召喚獣～第2の人生を歩むことになった少年～

白鳥隆士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 第2の人生を歩むことになった少年

【Nコード】

N4025J

【作者名】

白鳥隆士

【あらすじ】

起きたらいきなりわけのわからない場所にいて、さらにそこに神とか呼ばれる奴まできやがった。しかも死因がそんな適当だ！？それにいきなり第2の人生を歩むことに！はてさてどうなることやら・・・

プロローグ！（前書き）

友達が面白いと言っていたので読んでみると面白かった！そして小説も書いてみたいと思ったので書くことにしました。基本的に原作沿いでいきます。途中キャラがおかしくなる可能性があります。ついでに変な部分も出てくることがあるかもしれませんが。それでもいいという方のみお読みください。

それではどうぞ！！

ブローラーグ！

「ここはどこなんだ・・・」

真っ白な空間の中俺は呟く。

とりあえず現状の確認だな。

俺の名前は、大空翔吾。おおぞらしょうご 15歳の高1だ。

それで、確か俺は本屋に新刊の漫画を買いに行つて、家に帰つてる途中に・・・『隕石に頭ぶち抜かれて死んだんだよ』っ！！

「誰だっ！！」

俺がそう叫ぶと、何もなかった空間に割れ目が生じ、そこからまず人の腕が出てくる。はつきり言つてホラー以外の何物でもない・・・。

その後、なんか古代ギリシャの人っぽい格好をした人があらわれた。

「よっ」

そいつはまるで友達に接するかのように片手をあげ俺に声をかけてきた。

だが俺は警戒を解くことなくそいつに質問をする。

「お前は誰なんだ？なんで俺が死んだ原因をそんな詳しく知ってる？というよりお前人間？」

少々一気に言いすぎた感が否めないが、まあいいや。

「少しは落ち着け。きちんと説明してやるから。とりあえずだな、俺は世間一般的にいう神と呼ばれる存在だ。で、お前が死んだ原因

は俺にあるから死因に詳しいのは当たり前だ」

そいつは苦笑しつつもきちんと答えてくれたのだが・・・は？

「さて、どういうことだ？まあ、お前が人ではないことはさっきの現象で理解させられたからいい。暫定的に神ってことにしておこう。だが・・・死因がお前にあるってのはどういうことだ？」

ぶっちゃけ訳がわからん。

「そりゃそうだよな。いきなり言われて信じろってのがおかしいか。でもこれは真実なんだ。俺はお前の適応能力に期待するとするよ」

ふむ、ただの酔狂ってわけではなさそうだな。

「とりあえずお前が知ってることを教えてくれよ」

「OK、まず最初に謝っておく、悪かったな。勝手に殺しちまって神って結構常識人なんだな。」

「いいよ、過ぎたことを気にしても仕方ないんだ。で？なんで殺しちまったの？」

そこが一番重要だ。

「・・・暇つぶしに隕石落としたらお前に当たった」
は？

「だから、暇つぶしに隕石を落としてみたらお前に当たったんだよどちくしょー！」

いや、いきなりキレるなよ。というかそれはこっちのセリフだ。

「一応聞くけどどれくらいの確率だったんだ？」
興味本位で聞いてみる。

「0.0000000...1%」

おい

「どんだけ0が多いんだよ。数えきれねえじゃねえか」
というか、そんな確率なのに俺は当たったのか・・・。

「・・・うるさい！だから謝っただろう！」

「謝って済んだら警察はいらんわっ！！」

「というわけで」

「何がだよ！？」

「お前にはある世界で第二の人生を歩んでもらう」

「人の話を聞け！」

「大丈夫だ。ちゃんと困らないようにチート能力はつけてやるから」

「おい」

「質問はないか？」

「めちゃくちゃある」

「ないか。そうか。なら逝って来い」

「お前はどこの電波を受信中だこらっ！！しかも字が違っ！！」
しかし俺の言葉をことごとく無視し、こっちに手を向け言い放つ。

「じゃ、あつちの世界で頑張れよ」

その瞬間、俺の足元に黒い大穴があく。それを視認した瞬間、

「てめっ、うわあああああああああ！！！！」

落下。しかも極上の笑みでこっちを見てやがった。覚えてろよー！

！！！！！！！！

ブローローグ！続き（前書き）

ほんとは原作キャラと絡ませるまで行きたかったのですが・・・。
とりあえず、どうぞ！

プロローグ！続き

急に時間も吹き飛び、あの神に飛ばされてから16年。いやあ長かった……。ほんと……。マジでもう一回赤ちゃんからやり直すとはな……。

何故このような説明をしているかというと……。現実逃避だ。

今の時刻、11:34分。今日は別に休日でも祝日でも何でもない。普通に学校に行かねばならない平日だ。ついでに今日は何かあった気もするが……。ま、思い出せないってことはどうでもいいことなんだろうな。」

よし、今日はもうサボってしまおう！うん、それがいい。さて、ならば何をしようかな……。

ところ変わって、翔吾（以後、ショウゴと表記）の通う高校、文月学園。

きちんとした登校時間に、その学園の中の校舎に向かう道の途中で、2人の男子が話しながら歩いていた。

「ショウゴのやつ、今日どうしたんだろうな」

2人の片方であり、ショウゴの親友である髪がたてがみの如く立っている坂本雄二が言う。

「そうだね、今日はクラス振り分け試験の日なのに」

そう答えたのは雄二と同じく、シヨウゴの親友である女装・同性愛が似合いそうな外見の吉井明久が答える。

「まさか、アイツまた寝坊だとか言うんじゃない・・・」
雄二が少し思案顔で言う。

「まつさか！さすがのシヨウゴでもそんなことはない・・・筈」
初めだけは勢いよく、しかし最後の方では冷や汗を垂らしながら自信のかけらもなく明久は言う。

明久の言葉に、雄二も冷や汗を垂らす。

「まあ、アイツなら大丈夫だろ。それより、調子はどうなんだ？明久」
すぐに切り替えた。

その様子を見て明久もすぐに切り替える。

「大丈夫だよ。今日はなんだか行けそうな気もするし」
胸を張って言う。すると、

「なら、ウチから問題！」
背後から女の子の声が飛んでくる。

二人が振り返ると、そこには人差し指を一本立てているポニーテールにしている、2人と同じシヨウゴの知り合いである島田美波がいた。

「CH?COOHとは何でしょう?」
美波は、振り返った二人に出題する。

「……」

沈黙が走る。しばらくすると、明久がいたらと汗を垂らし、顔を背ける。

「吉井？」

そんな明久の顔をのぞこうとしながら美波は名前を呼ぶ。

「……英語は苦手なんだ」

明久は目を合わさないようにしながら答える。

明久の言葉を聞いた美波は、

「え……？これ英語じゃなくて化学「じゃ、僕こっちだから！」」

美波の言葉が言い終わると同時に明久は走りだした。

「ちょ、ちょっと吉井！アンタ相当やばいんじゃない？」「あー聞こえないー！！」

明久の回答に美波は叫びながら追うが、明久は耳を塞ぎながら校舎へと走って行った。

そんな二人を見ながら雄二はどこか遠い目をしながらつぶやく。

「ショウゴ、お前今日来なかったらアイツ怒ると思うぞ……」
残念なことに、本人には届かぬ言葉だったが……。

そして、時は流れシヨウゴ達に2度目の春が訪れた。

春の暖かい日差しを浴びながらゆる～いペースで歩きながら桜を觀賞するシヨウゴ。

「あゝ、今日もいい日なあゝ。日向ぼっこをしたら気持ちがいいだろうなゝ・・・」

そんなゆるゆるなことを言っていると、文月学園の校門が見えてきた。

すると、

「おい、大空、遅刻だぞ」

と、校門付近に立っている浅黒い肌をした、いかにもスポーツマンですよ的な空気を持っている男に声をかけられた。

「おはようございます、西・・・鉄人」

その人物にあいさつをしておく。

「何故言い換えた？そのままでよかっただろうが。まったく・・・そんなことを言うのはお前と吉井くらいだぞ」
ため息をつきながら言う。

「いやゝそれほどでも・・・」

「ほめてないぞ。それよりも他に言うことがあるんじゃないのか？」
ん？他に・・・？

「今日も肌が黒いですね？」

「お前は遅刻の謝罪より俺の肌の色の方が大事なのか？」
おお、そういえばそうだった。

俺が手を、ぽん、と打った様子を見て、またため息を吐きながら
西村教諭^{てっしん}は言う。

「もういい・・・それよりもほら、受け取れ」
そう言っ、俺に隣にあった箱から封筒を取り出し渡す。

「ま、結果なんてわかってますけどね」
サボったんだし。

「まさか、大事な振り分け試験の日にまで寝坊をするとは思わなかったぞ・・・」

「まあ、過ぎたことを言っても仕方ないですよ？鉄人」

「西村だ。まあいい。さっさと教室に向かえ」

「りょーかいです」

さて、Fクラスはどんなんだろう・・・。

ブローローグ！続き（後書き）

余力があればもう1話行きます。

1章 第一問（前書き）

日付変わっちゃいましたね……。というか、ところどころ変えています。ちょっと変かもしれませんがよろしく願います。
それではどうぞ！

1章 第一問

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例・・・ジユラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

大空翔吾の答え

『問題点・・・酸素と激しく反応するから

合金の例・・・ジユラルミン』

先生のコメント

あなたのテスト用紙にだれが付いていないことに先生は驚きです。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

先生のコメント
そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金（↑すごく強い）』

先生のコメント
すごく強いといわれても。

「遅れてすみません」
言葉とは裏腹にまったく反省の色を見せずにシヨウゴはFクラスに入っていく。

「よう、シヨウゴ。初日から寝坊か？」
その姿をみた教壇に立っている雄二が声をかける。

「しょうがないだろ？春なんだし」

「それは関係ないだろ・・・」
あっけらかんとしたシヨウゴに呆れた声で雄二は言う。

「ま、気にすんな。・・・よう、秀吉もいたのか」
雄二に手をひらひら振りながら教室全体を見渡し、知り合いの木下秀吉を見つけた俺は挨拶をする。

「おお、シヨウゴか。これから1年よろしくなのじゃ」

俺の言葉にあいさつを返したのは木下秀吉^{みけひでよし}。何故このような表記かというと、外見はどこからどう見ても美少女だからである。下手な女子よりも女の子らしい。

「ちょっとシヨウゴ、ウチもいるわよ」

横の方から美波があいさつをしてきた。そっちの方に俺は顔を向け、あいさつをする。

「よゝ、島田。よろしくな」

その時、教室の前のドアが開き、さえない顔をした先生と思わしき人物が入ってきた。

「HRを始めますので席についてください」
どうやら担任のようだ。

その担任の声を聞いて俺と雄二は適当に空いていた席^{ゆか}に座った。

「えー、みなさんおはようございます。2年F組担任の福原慎です。よろしく願います」

福原先生は名前を書こうと・・・やめた。うわゝ、チョークもまともにないって最悪だな・・・。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出てください」

その瞬間、クラス中から申告の嵐が起こる。

「俺の座布団に綿が入ってないんですけどー」

「我慢してください」

「俺の卓袱台脚折れてます」

「木工ボンドが支給されてるので、後で自分で直してください」

「窓が割れてて風が寒いんですけど」

「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので後で直してください」

きちんと一つ一つの申告に答えて行く。それらが一段落つくと、

「お・・・おくれました・・・」

教室に二人の生徒が入ってきた。

「よー、明久に姫路。二人揃って仲良く遅刻か？」

「ち、違うよ！姫路さんとは廊下であつたんだよ」

明久は俺の言葉を否定しながら俺の方へ向かってきた。

「・・・」

姫路は赤い顔でこっち、というか俺の顔をちらちら見ながら隣へちよこんと座った。

風邪でも引いてんのか？試験で倒れたって聞いたし。

「おい、姫路？」

「ひゃ、ひゃいつ！」

俺の言葉に過剰な反応を示す姫路。

「とりあえず落ち着け。そして、体は大丈夫か？倒れたって聞いた

が」

肩で息をしつつ、飛び上がっていた姫路の両肩に手を置いて落ちつかせながら聞く。

「あ、え〜と・・・はい、だ、大丈夫です・・・」

大分落ち着いた様子で答える。

「えー、それでは自己紹介をお願いします。そうですね、廊下側の人からお願いします」

先生が言った。

先生の言葉をきいた廊下側が一番後ろの席にいた秀吉が立ち上がる。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

いや〜、やつぱ男でも秀吉見てたら癒されるなあ〜。ただでさえこのクラスはむさ苦しいし。

「・・・と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

あ、バカなこと考えてたらいつの間にか終わってたな。

「・・・土屋康太」

そんなことを思ってたら次の人か。お、あいつは去年知り合った康太じゃねーか。相変わらず口数少ないな。そんなに目立ちたくないのか？

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話ができるけど読み書きが苦手です」

次は島田の番か。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は、

「
うん。」

「吉井明久を殴ることで
て、おゝい！お前らしいが自己紹介としてどうかと思うぞ？」

そんな扱いをされた明久の方を見ると、この世の終わりを見たかのような顔をしていた。まあ、お前去年から酷い扱いだし、当たり前か。

その後も淡々と自己紹介は進んで行き、明久の番になった。

「コホン、え〜と、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいな♪」

『ダアアーリーーン！！』
クラス全員（男子のみ）が一体となった。もちろん、俺も入ってるぜ（ニヤ）

明久はめちゃくちゃ笑顔をひきつらせていた。まあ、あんな野太い声で叫ばれたら当たり前か。

明久の次は姫路の番か。

「あ、あの姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」
ふむ、まともだな。おっと、そろそろ俺の番だな。

「俺は大空翔吾だ。下の名前で呼んでくれ。これから1年間よろしくな。後、俺の安眠を邪魔したら問答無用でぶっ飛ばすからな」

最後の脅しは忘れずに入れておく。睡眠は大事だからな。さて、最後は雄二か。

雄二は自分の番だとわかると、教壇に立つ。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ。さてみんなに聞きたい」

そこで雄二は一息入れ、この教室を見渡す。つられて俺らも一緒に見渡す。目に入ってくるのは、

カビ臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

雄二は俺たちの目をみて、静かに告げる。

「不満はないか？」

『大ありじゃあつ!!』

2年F組全員の魂の叫び。

「みんな考えは一緒のようだな。それで、これは代表としての提案だが」

すると、雄二は口元を笑みに変え、爆弾を投下する。

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

1章 第一問（後書き）

さてどうでしたでしょうか。明日（今日）も更新できたらしたいなあ。と思っています。どうか、これからもよろしく願います。

1章 第二問（前書き）

どうやら日付が変わってしまったようです・・・。
orz
まあ、楽しんでいただけると幸いです。
それでは、どうぞ！

1章 第二問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
『(2) 悪いことがあつたうえに更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

大空翔吾の答え

- 『(1) 河童の川流れ』
『(2) こけた上を踏まれる』

教師のコメント

前回に引き続き、正解ではありませんが何か変なものでも食べたんですか？

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『（２）泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

雄二のＡクラスへの宣戦布告。

それはこのＦクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

おい、どさくさに紛れて姫路に告白まがいのことした奴は誰だ。

まあ、普通に考えたらこのＦクラスとＡクラスの戦力差は火を見るより明らかだ。こんな反応をしてしまうのも仕方ないだろうな。

普通なら、だがな。

「このＦクラスでもＡクラスに必ず勝てる、いや、俺が勝たせて見せる」

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

そんな否定的な意見が飛ぶ中、雄二は話を続ける。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素がそろっている」

雄二の言葉にクラスがざわめく。

「それを今から説明してやる」

にやりと笑つて俺らを見下ろす雄二。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

雄二に呼ばれた瞬間、畳から顔を離して全身で否定のポーズをとる。

「は、はわっ」

それと同時に姫路もスカートの裾を押さえて後退する。

康太はその後畳のあとを手で隠しながら壇上へと向かう。

さすがはあの異名を持つだけあるな。よく恥じらいもなくあんなことできるよな。

「土屋康太。こいつがあのある有名な、ムッリーニ寡黙なる性職者だ」
康太を指差しながらみんなに言う。

「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

しかし、康太は全力で否定。だが、さっきの様子をみんなが見ていたわけで、

『ムツツリー二だと・・・？』

『だが見る。あそこまで覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ・・・』
といった反応である。

さて、このムツツリー二こと土屋康太は、本名のほうはそこまで有名ではない。だが、ムツツリー二という名前は、男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。

「????」

だが、どうやら姫路は知らなかったらしい。まあ、名前の由来が唯のムツツリスケベであることは伏せておいたほうがいいだろうな。

「姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「わ、私ですかっ？」

「ああ。うちの主戦力の一人だ。期待してる」

まあ、体調さえ崩さなかったらこの場にはいない人物だしな。このクラスでは頼りになる戦力だろう。

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだっただ』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらなないな』

だから、さつきから姫路にラブコールを送ってんのは誰だよ。

「さらに、大空翔吾だっている」

ここで俺？

『誰だ？』

『さあな、聞いたことがないな』

そりゃそつだろうな。特別な生徒でもない・・・

「こいつは授業やテストの時に居眠りや寝坊による遅刻、その他諸々の理由により晴れて吉井明久と共に＜観察処分者＞扱いになったやつだ」

わけでもないか・・・。

『・・・それってバカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違つよっ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そつだ。こいつにとってはバカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

「だが、シヨウゴの場合は違つ」

「無視するな！」

「お前らも一度は耳にしたことがあるだろうく死神」の名前を・・・
ん？なんだそれ。

「な！？そ、それは・・・」
どういうこと？

「たしか去年、居眠りなどの校則違反者を注意していたやつらが辻斬りにあつたつていう・・・」
あゝ、なんか懐かしい思い出が・・・。

「それで、その人物の格好が全身黒ずくめで骸骨の仮面をしていたというあれか！」
ていうか、いつの間にそんな名前が通っていたんだよ・・・。

「そう、ここにいる大空翔吾が犯人だ。それに、こいつもかなり頭がいいんだぞ？」
ここでそれをいうのか？

「どういうことだ？」

「高校に入ってからな、毎回赤点ぎりぎりの点しか取らずに居眠りばかりしてるからIQテストをやったことがあつてな。その結果が・・・IQ200オーバーの超天才野郎だったんだよ」
あゝあ、言っちゃった・・・。

「なっ！？Aクラスのやつらよりも頭がいいというのか？」

「だがそんなやつがなんでここにいる？」

「それはな、振り分けテストの存在忘れてそのままサボってたからだ」

おい、なんでそんな目で俺を見るんだよ。前向け、前を。

「あ、あのく観察処分者>ってどういうものなんですか?」

あ、優等生は関係ないから知らないのか?

「具体的には教師の雑用だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例で物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」
試験召喚獣とは幽霊みたいなもので、ものに触れないようになっている。ま、床だけは処置が施してあって立つことだけはできるんだけだな。

「そうなんですか?それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちだって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ」

まあな、実際先生がいなければ自由に呼び出すことも出来ねーんだし。俺は鍛えてるからどうでもいいが、明久このバカにはフィードバックされる痛みと疲労による負担は少し堪えるからな。

『おいおい、く観察処分者>ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。死神の上空はまだいいかも知れないが吉井のやつは使えないってことだよな?』

え?俺ってそんな扱い?実際に大丈夫だからいいけどさ。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」
あ、明久ひでー言われようだな。否定はできんが……。

「雄二、そこは僕をフォロースるところだよね？」

よく考えろ、雄二がそんなやつだと思うのか？お前は。

「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すごい大胆に無視された！」

それがお前の扱いなんだよ、明久。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆^{ペン}を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

それにしても、煽るのがうまいヤツだな。

『うおおーっ！！』

いい感じに纏まったな。

「お、おー……」

姫路も小さく拳を握って掲げていた。うーむ、可愛いな。お、明久も見つめてるな。

「よし、明久、シヨウゴ。ちょっとこっちにきてくれ」
二人を見ていると雄二が声をかけて来た。なんだろうな……。

「そういえば、雄二。なんで試召戦争をやるうなんて言ったの？ 勉強とか好きじゃないだろ？」
「そういえばそうだな。」

「なに、ただこの世は勉強だけがすべてじゃない。てことを証明したくてな。それよりも、明久。お前のほうこそどうしたんだ？ 試召戦争の話のときにあんなに姫路を見つめてへえ、そんなことやってたんだ。」

「な、何言ってるのさ雄二。ぼ、僕は……」
めちやくちゃ動揺してるじゃねーか。

「どうせあれだろ？ 姫持の為にこの教室をどうにかしたいとか」

「ナ、ナンノコトカサツパリダネ……」
そんな額に汗流しながら片言に言ったら丸わかりだぞ？

「ま、というわけでDクラスへの宣戦布告の使者になってもらうかどうかというわけだ？」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」
ふむ……、どうやって説得するかな……。ん？ 雄二からのアイコンタクト……。そういうことが、わかったぜ（ニヤ）

「大丈夫だ、Dクラスのやつらがお前に危害を加えることはない。」

だまされたと思って行ってみる」

「本当に？」

「ああ、俺たちの目を見る。うそを言っているような目に見えるのか？」

そういつて真剣（そうな）目で明久を見る。

明久も俺たちの目を見る。

「大丈夫だ、俺は友人をだますような真似はしない」
雄二がダメ押しといわんばかりに言う。

「やれやれ、そんな風に言われたら行くしかないじゃないか」
よし、引っかった！

「ああ、頼んだぞ」

明久の背中に雄二が言う。

そして、明久はクラスからの拍手と歓声、俺たちの不敵な笑みを背中に受け、Dクラスへと向かっていった・・・。

1章 第二問（後書き）

さて、小説内でショウゴ君の説明描写を入れられるかどうか微妙なところな気がしますのでここに書いておきます。

大空翔吾

男 AB型

11月10日生まれ

身長 霧島翔子よりも少し高いくらい。

容姿 黒髪黒目がデフォ。顔は中性的よりも女顔より。女装をしたら、正体を明かさなない限りはばれることはない。
髪は伸ばし続けて、腰あたりまである。いつも、一まとめにしていくつである。

雄二と翔子とは幼馴染。雄二とはよく気が合い、互いのことは大体理解している。雄二と一緒にいつも明久をいじる。S気質。
基本的には人当たりのいい性格だが、知り合いに何かあった場合はその原因を徹底的に叩きのめす。
チート能力ありで、出てくるたびにあとがきに書いていきます。

こんなもんですかね。それでは、また次回もよろしくお願いします。

1章 第三問（前書き）

更新に少し日が空いてしまいました。どうか見捨てずに見て下さい。
それでは、どうぞ！

1章 第三問

問 以下の英文を訳しなさい。

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.』

姫路瑞希の答え

『これは祖母が愛用していた本棚です。』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

大空翔吾の答え

『これはうちのクソババアが使ってた本棚だ。』

教師のコメント

先生はあなたがまじめにやるようになってくれてうれしいです。しかし、言葉づかいは直しましょう。

土屋康太の答え

『これは』

教師のコメント

訳せたのは”This”だけですか。

吉井明久の答え

『● “♪★×”』

『

教師のコメント
できれば地球上の言語で。

「騙されたあつ！」

叫びながらぼろぼろの格好の明久が教室に入ってくる。

それを見た俺と雄二は、

「やはりそうきたか」

冷静に言い放つ。

明久は俺たちが言い放った瞬間、殺気が籠った目をし、

「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。このくらい予想できなくて代表が務まるか」

「そうだな。お前も雄二の友達ならこうなることがわかってただろ？」

「少しは悪びれるよ二人とも！」

そんな感じで明久をいじって遊んでると、

「吉井君、大丈夫ですか？」

姫路が明久に駆け寄る。おお、やっぱり優しいな姫路は。

「吉井、本当に大丈夫？」

島田まで？まあ、どうせこいつのことだし、

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、よかった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……。こうなるよな。」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」
慌てて腕を押さえて転げまわる。邪魔なことこの上ないんだが……。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

雄二は俺たちにそう言い、明久に優しさの一つも見せずに教室から出て行く。

「あの、痛かったら言って下さいね？」
そう告げて姫路は雄二の後を追う。

「大変じゃったの」
秀吉は肩を叩いて廊下へと出る。

「さっさと行くぞ、明久、康太」

「……………（サスサス）」

「ムツッリーニ、覗いていた時に畳の跡ならもつ消えてるよ？」
明久は俺の後に付いてきながら康太に言う。

「……………！！（ブンブン）」

しかし、康太は否定。

「いや、今更否定されても、ムッツリーニがHなのは知ってるから
まあ、去年からの付き合いだしな。」

「・・・・・・・・！！（ブンブン）」
しかし、康太は否定を続ける。

「・・・何色だった？」
いきなり、明久は何を言うんだ・・・。

「水色」
即答かよ。

「やっぱりムッツリーニは色々な意味で凄いよ」
これには同意だな。

「・・・・・・・・！！（ブンブン）」
そんな呑気な会話をしながら雄二の後を追っていった。

雄二が向かった先は屋上だった。雲ひとつない空から眩しい光に、
風ではためく姫路のスカートを凝視している康太を除いて俺たちは
目を細めた。

「というか康太よ、どれだけお前はエロいんだ・・・。」

「明久。宣戦布告はしてきたな」

雄二はフェンスの前にある段差に腰を下ろしながら言う。

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」
俺たちもそれに倣い各々腰を下ろす。

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」
島田は明久の言葉を聞いて、雄二に確認する。

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ？」
「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

「雄二がそんな人間でないことはとうに知っているはずだろ？」
雄二がそんなにやさしい人間ならこれまでのいじめは起きてないしな。

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」
姫路は驚いた様子で明久を見る。

「いや、一応食べてるよ」

「・・・あれは食べていると言えるのか？」
雄二が横やりを入れる。これには同意だな。

「何が言いたいのさ」
何がってそりゃあ、

「お前の主食って————水と塩じゃねえか」
俺は憐れむような声で明久に言う。

「きちんと砂糖だつて食べているさ!」
何故かふんぞり返ったように言う。

「あの、吉井君。水と塩と砂糖つて、食べるとは言いませんよ・・・」
「さすがの姫路もこれには引くか。」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」
秀吉がそう言うってから全員で生温かい目をしながら明久を見る。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」
自業自得の極みだな。

「し、仕送りが少ないんだよ!」
明久は反論。しかし、この内容に対して思うことが一つある。

「でも、お前俺と同じくらいの仕送りだろ?」
補足だが、俺の家の両親も仕事のため外国に2人で行っていて、明久と同じくらいの額をもらっている。

「・・・あの、よかつたら私がお弁当作ってきましようか?」
明久が沈黙しているとき、姫路からの救いの手が差し伸べられた。

「彘?」
突如の事態に明久が固まった。ま、好きな人からそんなこと言われたら当たり前か。

「本当にいいの?僕、塩と砂糖以外のものを食べるのなんて久しぶりだよ!」
めちゃくちゃ嬉しそうなオーラを発しながら最終確認をとる。とい

。うより、どんだけお前の食生活はそんなさびしいものなんだよ・・・

「はい。明日のお昼でよければ」

姫路は肯定する。

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

いやゝ、嬉しそうだねゝ。青春だな。

「・・・ふゝん、瑞希ってずいぶん優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

おゝっと、ここで島田が介入か。随分と棘のある言葉だな。

「あ、いえ！その、皆さんにも・・・」

おおゝ、どんだけいい人なんだよ姫路。あ、でも・・・、

「わるい、今冷蔵庫にあるものが賞味期限切れそうだから俺はいいや」

。タイムセールで買い込んだ食材をそろそろ消費しないとやばい・・・。

「そうですか・・・」

「わるいな。また機会があればよろしくな」

笑顔で謝罪。これが基本だ。

「／／／／／」

あれ？姫路、島田、秀吉の三人はなんでそんなに顔を真っ赤に？

「そ、それにしても姫路さんって優しいね」

微妙な空気になりかけたところで明久が姫路に言う。ナイスタイミングだ、明久。助かったぞ。

「そ、そんな・・・」

赤い顔のまま、姫路さんは俯く。体調でも悪くなったのか？

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き――

――」

「おい明久。今振られると弁当の話は無くなるぞ」

「――にしたいと思ってました」

うおい……。カミングアウトにも程があるな……。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」
秀吉が若干引いた目で明久を見つつ言う。

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

「そうだな。俺たちの予想の斜め上を突っ切るな」

「だって・・・お弁当が・・・」

すこしは自分で何とかするという選択肢はないのかよ……。

「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

もともとはそんな話だったな。

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや

「？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そついえばそうだな」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」
雄二が鷹揚にうなづく。

「どんな考えですか？」

「いろいろ理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりクラスが上だよ？」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子メンツをよく見てみる」

「えーつと・・・」

雄二に言われて俺たちを見る。

「美少女二人と馬鹿が二人とムツツリが一人と観察処分者が一人いるね」

「誰が美少女だと！？」

「ええっ！？雄二が美少女に反応するの！？」
ナイスだな、雄二。

「・・・(ポツ)」

「ムツツリーニまで！？どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れない！」

お前は頑張ったよ・・・。

「まあまあ。落ちつくのじゃ、代表にムツツリーニ」とりあえず、秀吉が場を収めた。

「ま、要するに姫路に問題のなくシヨウゴもいる今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかとやり合っても意味がないってことだ」
雄二がそれた話を元に戻す。

「？それならDクラスとは正面からぶつかるど厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「明久。オマエAクラスに何の策もなしで突っ込む気か？雄二だってきちんと理由があってDクラスを攻めるんだ。最後まで話は聞いておけ」

馬鹿なことを言った明久に俺は言った。

「続けるぞ。まず、これは初陣だからな。派手にやって景気づけにしたいんだろ？それに、シヨウゴが言ったようにAクラスを倒す作戦に必要なことだからな」

まあ、作戦内容までは教えちゃくれなかったか。

「あ、あの！」

俺たちが話を進めていると姫路が大きな声を発する。

「んあ？どうしたんだ姫路」

理由を聞いてみよう。

「えっと、その。さっき言いかけた、って・・・吉井君と坂本君は前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

そういうことか。

「それはな。ついさっき姫路の為にってあ「それはそうと！」むう」いきなり遮るように言っつなよ、明久。せっかく面白くしてやろうと思っただのに。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」無理やりな軌道修正な気もするが・・・。

「負けるわけないさ」

雄二は明久の言葉に対し、自信満々に言う。

「お前らが協力してくれるなら勝てる」

おお、いい顔だな。雄二。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは——最強だ」

俺たちを見渡しながら雄二は言った。

「そうだな。一つ頑張ってみるか」

「いいわね、面白そうじゃない！」

「そうじゃな、Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「・・・（グッ）」

「が、頑張りますっ」

俺は全員の心が一つになったと思う。

そんな俺らを満足げな表情で雄二は見る。そして、

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

俺たちはそう言った雄二の言葉を聞き洩らさぬよう、注目した。

1章 第三問（後書き）

どうでしたでしょうか。本当は戦争まで行こうと思ったんですけど、いつもの字数を大幅にオーバーしてしまうことになるので次回へ持ち越しです。

次回は明日投稿したいと思います。

それでは、みなさんまた明日〜。

1章 第四問 試召戦争初陣！前篇（前書き）

すみません、今回の問題は筆者の習ってない問題だったためショウゴの答えを用意できないということでお休みさせていただきます。マジですいません・・・。

主人公のキャラが訳分からなくなってる感じがしますが・・・、お楽しみください！

1章 第四問 試召戦争初陣！前篇

あゝ、どうも主人公のシヨウゴです。さて、現在俺たちはDクラスとの戦争に入ったわけなんだが・・・、

『さあ来い！この負け犬が！』

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐えきれぬ気がする！』

『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わるころには趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう』

『お、鬼だ！誰か、助けっ

—— イヤアア

——（ボタン、ガチャ）』

うん、地獄を垣間見たね。ていうか鉄人。それは教育でなく洗脳と
いうのでは？

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

おろ？明久のやつどうしたんだ？

「ん、なに？作戦？なんて伝えんの？」

「総員退避、と」

「この意気地なし！」

明久は眼つぶしを食らった。効果は抜群だ！・・・アホらし・・・。
明久はというと、その辺を某お空の上のお城の王族の大佐みたいなことを言いながら転がりまわる。

そんなことをしていざ前線へ攻めようとしたとき、

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ」

あれ？さっきと言ってること違ってね？

しかし、二人が逃げようとした瞬間、本陣にいるはずの横田がいた。

「代表より伝令があります」

なんだろうな。ま、俺は先に行くか。

そう思っただけで前線へ向かうと秀吉がこっちに走ってきた。

「シヨウゴ、援護にきてくれたんじゃない！」

笑顔で俺に向かってそう言う。その辺の女子よりも可愛いなあ。

「秀吉、大丈夫か？」

まあ、俺は秀吉に状態を確認する。

「うむ。戦死は免れておる。じゃが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい。そう言うシヨウゴはどうなんじゃ？」
よかった、秀吉は鉄人の餌食にはなっていないんだな。その一点のみ

に安堵する。

「おう、テストも受けたから大丈夫だ」

久しぶりに本気でテストを受けたな。先生の驚いた顔が面白かった
(笑)

「そうか。なら前線は任せたぞい」

そう言っただけで秀吉は教室に戻って行った。

さて、ならその期待にこたえとしましょうか！

「五十嵐先生！Fクラス大空翔吾がそこにいる・・・ええい！名前はわからん！A、B、C、Dに勝負を仕掛けます！」

『ひどっ！』

知らないんだからしょうがないだろ？

そんなことよりも・・・

「『試獣^{サモン}召喚っ！』」

その瞬間、俺の目の前に俺をデフォルメした召喚獣があらわれる。
その姿は、全身黒で統一されており黒いマントを羽織り、黒い大鎌を持つといった完璧に死神の姿だった。

そして、点数が表示される。

Fクラス大空翔吾 VS DクラスA、B、C、D

化学 1256点

539点

『・・・は?』

俺の点数を見た瞬間、Dクラス諸君の動きがとまる。
戦場で動きを止めるとは・・・まあいい。

「Fクラス大空翔吾。デス。イズ、出るぞ!」
正直これはノリです。

「はっ! 所詮相手は1体だ。全員で一気に攻めるぞ!」
俺の声にいち早く気が付いたAが全員に声をかけ、仕掛けてくる。
が・・・、

「ステルス」

俺が呟いた瞬間、召喚獣の姿が消える。

『なっ!?!』

またしても全員が突然のことにフリーズする。

「どこ見てんだお前ら。俺の召喚獣はこっちだぞ」
そう言った瞬間に大鎌を振り上げている俺の召喚獣が4体の後ろに
現れる。

「Good bye」

お別れの言葉を告げ4体を一瞬にして倒す。そして、4人は、

『い、いやだーーーー!!』

『さっさと来い!!』

鉄人に連れてかれちゃった」

「ねえ、シヨウゴ」

ん？明久か。

「どうした？前線指揮はお前の仕事だろ？」

「いや、そうなんだけどさ……。それよりも、シヨウゴの召喚獣さ、姿と武器変わってない？」

おお、そついや説明してなかったな。

「こいつは俺の腕輪の能力だ」

そう言つて俺は召喚獣の右腕を挙げる。そこには黒色の腕輪が巻かれている。

「へーそうなんだ。それじゃ心配ないと思うけどシヨウゴも気を付けてね」

「無問題だ。お前も頑張つてこい」

そう言つて俺らは拳をぶつけあつ。そして、明久は前線へと向かつていった。

んー、俺はどうしようかな……。ま、その辺にいる雑魚でも相手するか。試したいことも色々あることだし。

「高橋せんせー。この辺にいるDクラスに勝負を仕掛けます」

『馬鹿にしてんのか！』

俺の発言にそこらにいるDクラスがキレる。

「馬鹿になどしてないさ……。見下してんだよ」

もうどうにでもなってますえ。

最後の俺の言葉がDクラス諸君の堪忍袋の緒を切ってしまったらしい。全員が殺気を全身から撒き散らしている。

「まあ、行くぞ！『試^{サモン}獣召喚っ！』」

その瞬間、全員の前に召喚獣があらわれる。が、

『お、おい！情報と違うじゃねーか！』

Dクラスの一人が俺の召喚獣を見ながら言う。

そう、俺の召喚獣はさっきの姿とは変わって死覇装に刀を持っていた。

Fクラス大空翔吾 VS Dクラス不特定多数

総合科目 7093点 ???

『えっ？』

こちらでもやはり俺の点に目が点になっていた。（ダジャレじゃないよ？）

「さて、正解！」

そう言った瞬間、黒い旋風が俺の召喚獣の周りに巻き起こり、収まった瞬間、漆黒の刀に漆黒のローブを羽織った召喚獣になる。

「天鎖斬月」

よし、これも成功！

『な、なんなんだ！あれは！』

む、あれとは失礼な。きちんと名前で呼びなさい！……人のことは言えないが。

「さて、行くぞ」

さっさと終わらせるか。

俺の召喚獣は一瞬で敵のド真ん中までたどり着く。全員速すぎて対応できてないみたいだ。

これは好機！遠慮なく行かせて貰うぜ！

ということでオーバーリミッツ発動！その余波で周りにいた奴は吹き飛ばす。

「蒼破刃！」

刀を振った瞬間、青色の衝撃波がDクラスの一部を巻き込み吹き飛ばす。

「さらに、牙連蒼破刃！」

振り向きざま、後ろにいた奴らに連撃を加え、

「これで済むかよ！裂衝蒼破刃！！」

空間を刀で×印に切り、魔力を込めてある裂傷が生まれ、その中心に蒼破刃を叩き込み、残ったやつらを一気に吹き飛ばした。

「任務完了」

もう、なにがしたいんだらうね・・・。

ま、あらかた片付いたしFクラスに帰るとしようか。

1章 第四問 試召戦争初陣！前篇（後書き）

今回は訳がわからないですね。いろいろなところから引つ張ってききました。

これからの試召戦争などではこんな感じになりますけどどうでしょう？なにかご指摘、感想などがございましたらよろしく願います。

それではまた次回もよろしく願います！

2011 3 / 16 日追記

何か主人公の召喚獣の理由がわけわからんので腕輪に変更。

能力…なりきり

操縦者の頭に思い描かれたものになりきる能力。変わること点数を100点消費。

1章 第四問 試召戦争初陣！後篇（前書き）

どうも。ようやくDクラス戦決着付きました。

後、前回の感想に点がやりすぎという感想をいただきました。

自分でもまあ、やつちまった感たつぷりなのですが、ここまできたらもういいやつ！と開き直すことにしました。こういうのが苦手な方もここで戻るを押した方がいいでしょう。

チートなんでもこいやー！！という人は引き続きお読みください。
それではどうぞ！

1章 第四問 試召戦争初陣！後篇

「ただいま」

そう言いながらFクラスの教室のドアを開ける。

「シヨウゴ、派手にやったな」

雄二が俺を見ながら笑う。

「まあな。もつと快適な睡眠をするためならこの程度の労力はなんともないさ。それより、今の戦況は？」

「まあ、五分といったところだな。お前が教室辺り以外にいるDクラスを排除してくれたからな。このままいけば下校時間まで持たすことは可能だろう」

「そうか。なら俺は「坂本！Dクラスは船越先生を呼んできたぞ！」む」

緊急だから仕方ないが人の言葉を途中で遮らないように。

「そうか。なら偽情報を流すべきだな」
それには俺も賛成だ。

「おい、雄二。いいこと思いついたぞ」
これなら完璧だ。

「なんだ？言ってみろ」

「それはな、ごによごによ・・・」
二人の耳にささやく。聞いた二人はすぐいい笑顔を見せていた。

「それなら大丈夫だな」

雄二は笑ったまま言う。

「わかった。なら俺はこれを流してくる」

須川もめちゃくちやいい笑顔を作ったまま教室を出て行った。

「あいつがどんな反応をするのか楽しみだな、雄二」

「そうだな」

ピンポンパンポーン 連絡いたします

お、始まったな。

船越先生、船越先生
もうチョイだ。

吉井明久君が体育館裏で待ってます
Fクラスにいる奴全員が聞き入る。雄二は隣で笑いをこらえている。

生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです
だっっはっはっはっはっは！！！！

俺と隣の雄二が大爆笑。クラスにいる奴は、

『吉井隊長、あんたぁ・・・男だよ！』

や、

『吉井隊長・・・あんたの死は無駄にはしない!』

等と言つて前線に向かつて行つた。おい、代表の護衛はどうしたよ。まあ、別に俺だけでも問題はないのだが。

「俺たちもそろそろ行くぞ」

雄二はそう言つて立ち上がる。

「あれ、もうそんな時間か」

「ああ、だから止めなかつたんだよ」
それもそうだな。

「ま、それでもものんびりしてる暇もなさそうだ。さつさと行くぞ」

「ほいさ」

そう言い俺も立ち上がる。

「おゝ、派手にやってるな」

雄二の傍を走りながら言う。

具体的にいうと、明久の召喚獣の機敏な動きに相手が驚いている間に翔子のスカートがめくれたと言つて相手の気をそらした後、消火器をそこらじゅうに掃射。そして、使い終わった消火器をスプリングクラーにぶつけ、誤作動させるといったものだった。しかも、そ

れらをすべて島田のせいということにして。

明久よ。おまえ絶対後で三途の河を見ることになるぞ。

その後明久のもとにたどり着いた近藤が明久の近くにいた奴を撃破して、俺たちは教室に帰ることになった。

「明久、よくやった」

「そうだな、いい仕事をしたな」

雄二と俺が明久に労いの言葉をかける。らしくないことだとは思うのだが、俺たちの顔はどう見ても本心は別のところにあるような笑顔である。

明久も、それを不審に思い、しかもその原因にまで思い至ったらしい。

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ、ばつちりな」

すごくいい笑顔で言い切った。

明久のやつ、こういうところでは無駄に頭が回るくせに、どうして他のところではその力を発揮しないのだろう。

しかし、明久はいつもなら俺たちに飛びかかっているはずなのだが、今回はそうしない。

「雄二、シヨウゴ。須川君がどこにいるか知らない？」
ものすごく殺気だっている。一周回ってまわりに黒いオーラが見えるほどに。

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」
雄二が軽い調子で言う。

雄二の言葉を聞いた明久は「やれる、僕なら殺レル・・・」などと呟く。不気味だ。

「ちなみにだが」
どうやら種明かしをするらしい。ま、今の明久に効果的な言葉もあるだろうか。

しかし、明久は須川をやることにしか頭にないらしい。

「犯人はこいつだ」
と俺を指しながら言う。

その瞬間、素晴らしい反応速度と瞬発力で俺に突っ込んでくる。正直まじめに一撃でノしてもいいのだが、

「あ、船越先生」
だだだだだつ、ボタンっ！！
卓袱台を蹴飛ばしながら、一瞬で近くにあつた掃除道具箱に身をひそめた。面白いな。

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけるか」
雄二は明久のことを完全に放置し、Fクラス全員に言う。

「そうじゃな、ちらほらと下校しておる生徒も見え始めたし、頃合いじゃろっ」

秀吉は微妙に気にはしているらしい。横目に少しだけ掃除道具箱を見ていた。

「・・・（コクコク）」

ムツツリーニはスルーと。

「おっしや、Dクラス代表の首級^{くび}を獲りに行くぞ！」

『おうつ！』

雄二の掛け声に全員がこたえ、そろそろと出て行った。

可哀そうなので、明久に声をかけておく。

「明久、船越先生のことは嘘だ」

そう言って、一瞬で戦場まで駆ける。

後ろで叫び声が聞こえた気もするが、気のせいだということにしておいた。

「下校している連中にうまく溶け込め！取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

戦場では雄二がよく通る声で全員の指揮をとっていた。

そのおかげか、うまくDクラスのやつらを撃破している。さて、俺

ももうひと頑張りし『おいつ！死神がきたぞ！』やれやれ、俺も人
気者になったもんだ。

「なら、俺の周りにいる奴に『Dクラス佐藤がFクラス大空翔吾に
古典で勝負します』ちっ」

「『^{サモン}試獣召喚！』」

Fクラス大空翔吾 VS Dクラス佐藤
古典 753点 102点

「せいやっ！」
現れた俺の召喚獣が一瞬で相手を殴り飛ばす。今回の武器はさらし
を巻いただけの素手だ。

『きゃっ』

フィードバックないのにそんな反応をするのかよ……。

「さて、今度こそ全員に挑ませてもらおうか」

『くっ』

「『^{サモン}試獣召喚！』」

Fクラス大空翔吾 VS Dクラス不特定多数
古典 743点 平均94点

お、今回から平均が出たのか。それにしても、やっぱり鎧をただの
さらし巻いただけの素手で殴ったらダメか。微妙に点減ってるし。
痛みはそれほどじゃなかったが。

面倒だ。今回はこれで行こう。

そして、召喚獣があらわれる。今回は、黒いコートに召喚獣の1、5倍くらいの長さの剣を腰にさした姿である。

「エンシェントスベル古代魔法メテオ」

そう言うのと、召喚フィールドにいる相手に隕石が降り注ぎ、運よく残った2体以外は全滅した。

「う、うおー！」

最後のあがきか知らないが2対同時に特攻してきた。

「七閃」

カチツと音がした瞬間、七つの斬撃が2体を襲った。2体が戦死した瞬間にはすでに鞘に剣がある状態である。

ふゝ、片付いたか。さて、あっちの方は・・・。

そう思つて見ると、ちょうどDクラスの代表である平賀に姫路がとどめをさしているところであつた。

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおー！』

Fクラスが一斉に叫ぶ。まあ、初陣で初勝利だしな。

『坂本握手してくれ!』

『大空も!』

なんつーか、この英雄的扱いは嬉しいんだが、嫌だな。面倒だし。

「僕も!」

「ん? 明久か」

ぶんっ どぐしゃあ!!

「ぐはあっ!!」

効果音の後、明久がぶっ飛ぶ。

効果音はこうだ。

ぶんっ ↓ 明久の包丁と俺の振り向きざまの右ストレート。

どぐしゃあっ!! ↓ 明久が殴られぶっ飛んだ音。

「いきなり何するのさ!!」

こいつは・・・。

「お前の握手とはこれを使うのか?」

そう言って手に持った包丁を突き付ける。

「・・・シヨウゴ、みんなで何かをやり遂げるって素晴らしいねっ」

明久は性懲りもなく、俺の手首を握るが、

「そうだなっ」

手首を返してすぐにはずし、逆に手首をつかみ返してからひねる。

「いたたっ」

「おい、誰かペンチを持って、ス、ストップ！僕が悪かったよ」

そうか……。なら代わりに釘とトンカチを「わかってないじゃん
！！ほんとに反省してるからっ」ちっ

せっかくの生爪が……。

「よし、交渉成立だな」

あれ、もう雄二のやつDクラスと交渉したのか。

「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した補給を行うから、
今日のところは帰ってゆっくり休んでくれ！解散！」

さて、俺も帰るとしようか。

後ろで雄二と姫路が話していて、近くで明久が独り言をぶつぶつ言
ってた気もするが、まあ、帰ろう。

1章 第四問 試召戦争初陣！後篇（後書き）

今回もネタが入りましたね。どうでしたでしょうか。

今回はようやく、プロローグで雄二の言ってた“アイツ”が出すことが出来ます。長かった……。ちなみに原作メンバーです。それではまた次回！

1章 幕間その1 アイツとのエンカウント（前書き）

どうも。少し更新が遅れました。さて、今回はBクラス戦の前に
息入れます。

というわけで今回も問題はなしです。少し短いですがどうぞ！

1章 幕間その1 アイツとのエンカウト

試召戦争での初勝利をおさめ、割と高揚した気分で今日の晩御飯を決めながら帰っていた。そのとき、とっさにその場にしゃがむ。すると次に瞬間、さっきまで頭のあった場所に手が伸ばされていた。それをみて、今日に限って忘れていたことを思い出した。

ギギギといった擬音が聞こえてきそうな動きでその手の主の方に顔をむける。そこには・・・、

「・・・」

無言でこっちを睨みつけている我が幼なじみ、霧島翔子がいた。

「よ、よう・・・」

俺は今出来る最大の笑顔を向けながら挨拶をする。

本人は気付いてないが、冷や汗をだらだらと流し、軽く震えている。

そんな笑顔を受けた翔子は変わらないの無表情で、睨みつけながら口を開いた。

「・・・どうして今まで逃げていたの」

「それはだな、俺がお前「嫌いになったの?」いや、最後まで聞けよ。俺がお前との約束を破っちまったからな。お前の制裁を受けないっ!と途中でアイアンクローをかますな!危ないから!」

あの威力は正直洒落にならんからな。

「シヨウゴが悪い。逃げずに謝りにきていたら許してあげてた」

「本当か？」

なんとなく聞いてみる。

「うん、許してた」

そうか・・・それは失敗したな。

「制裁をした後に」

おい。

「それじゃ今と変わらないだろうが」

「逃げずに来れば謝罪は聞いた。でも今は問答無用」
怖いな。どうにかして機嫌をとらねば！

「えーっと、晩飯食わしてやるからさ」

ダメ元でさっきまで思考の中心にあったものを提案してみる。

「・・・わかった。今回はこれで手を打つ」
助かった・・・。

「なら、7時くらいに家に来てくれ」
俺の言葉に翔子はうなずく。

さて、今日の晩飯はどうしようかね。

家に帰り、冷蔵庫を見る。何とか2人分の食事は作れそうだ。

今日は和食の気分かな．．．。
よし、和食に決定！まずは．．．、

調理も終わり、後は盛り付けを残すだけになったとき、

ピンポン

その音を聞いて玄関に向かって言う。

「あいてるから入っていいぞ」

俺の声を聞いて翔子がりビングに入ってくる。

「いらっしやい、ナイスタイミングだ」

皿に盛りつけながら入ってきた翔子に言う。

「今日は何？」

俺の方に近づきながら翔子が聞いてくる。

「今日はだな、ぶりの照り焼き、豚汁、ヒジキと大豆の煮物、白米だ」

盛り付けも終わり、テーブルの上に運びながら言う。

皿も運び終え、俺たちはそれぞれの席に座る。

「そんじゃ、いただきます」

「いただきます」

二人で手を合わせてから食事を開始。美味しくできたかな・・・？

「ふうゝ・・・食った食った」

背もたれによたれかかり、だらゝとした態度になる。

「シヨウゴは食べ過ぎ」

そんな俺を見ながら翔子は呆れたような、もしくは我が子を見るような目で見ながら言う。

「何を言う。たかが米三合だぞ？」

うん、別に普通だろ？

「普通１食でそんなに食べる人はそうそういない」
「そうかねえ・・・。」

「そう」

てか心でも読んでるのか？うまい具合に返事を返しているが。

「地の分を」「はい、ストゝップ。メタ発言は禁止」シヨウゴの顔はわかりやすい」

ふう、危ない危ない・・・。翔子がそんなことをする子になるとは。それにしても・・・、

「そんなにわかりやすいか？」

別にそこまでわかりやすいとは思わないんだが・・・。

「少なくともわたしはわかりやすいと思う
そーなのか。」

「そう」
もういいや。

「で、どうするんだ？」
いいながら時計を見る。すでに九時半だ。いい子ならば寝ているか
もしれない時間だ。

「今日のところは帰る」

「そうか。なら送ろうか？」
こんな時間に独り歩きさせるのはよくないだろう。

「うん」
さて、ならば・・・。

「ちょっと待っててくれ」
そう言っつて自室へ向かう。まだこの時期は寒いからな。上に羽織る
ものが必要だ。

「わるい、待たせたな」
玄関ですでに待っていた翔子に言う。

「別に大丈夫」

「そうか。なら行こう」

翔子にそう言う。翔子はそれにならずく。

それから、翔子を送り届け、明日の弁当の仕込みをしてから休むことにした。

1章 幕間その1 アイツとのエンカウント（後書き）

アイツとは翔子のことだったんですね。ていうか、あのアイアンクローどれくらい威力あるんだろ・・・（汗

さて、翔子が出てきましたが変な部分があつたかもしれないので指摘などがあればよろしくお願いします。もちろん、他の部分の指摘でも感想でも大歓迎です！

それでは、また次回！

1章 第五問 根元！てめーは俺達を怒らせた！ 前篇（前書き）

お久しぶりです。本当は先週に投稿できたのですが……。何故か創作意欲の急激落下により、遅れてしまいました……。すみません・・。

これからもしばしばこういうことが起こってしまうかもしれません
が、どうか見捨てずに読んでください。

それではどうぞ！

1章 第五問 根元！てめーは俺達を怒らせた！ 前篇

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

大空翔吾の答え

『テンプレ主人公の力とか属性』

教師のコメント

その答えは間違つてはいますが先生的には間違つてないと思います。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

いつも通り遅刻寸前の時間にFクラスのドアを開ける
それと同時に明久が俺の横を駆け抜けて行った。

それを廊下の角を曲がるまで見送った後、教室の中に入る。

「はよ〜っす。明久のやつどうしたんだ？」

ついに自分の馬鹿さ加減に悲しみを覚えてどこかに泣きに行ったとか？

「よう、ショウゴ。明久なら今日の一時間目が原因で走って行ったんだ」

いつも通りツンツンに髪の毛を逆立てた雄二が言う。

というか、一時間目が原因ってどういうことだ？

「おはよう、大空。その原因ってというのが一時間目のテストの監督の先生が船越先生なのよ」

島田が心から愉しそうに言う。

まあ、でもそれなら納得だ。

さて、あいつが船越先生をどうするのか今日のイベント第一弾かな・・・。

「ヴぁゝ・・・つかれた・・・」

机に突っ伏しながら明久が言う。まあ、テストもだろっけど大半は船越先生をどうにかするのに体力を使っただけだな。

「まあ、そうだな」

肩や首の関節を鳴らしながら答えておく。

「そうじゃの。わしも同じ気分じゃ」

秀吉がこっちに来ながら言う。

「って、シヨウゴはほとんどテスト寝てたでしょ!」
急に立ち上がってこっちにビシッとという効果音が聞こえてきそうな指し方で指をさしてくる。

「秀吉、髪をポニーテールにしたんだな」

明久の指を本来曲がらない方向へ曲げながら秀吉に言う。

「うむ。こっちの方が楽じゃからな」

頭を振ってこちらに見えるようにする。てか、明久五月蠅い。

「秀吉に似合ってて可愛いな」

何気ない一言。その一言によって秀吉は頭から煙を出して固まってしまった。

「ん？秀吉どうしたんだ？」

目の前で手を振る。しかし反応はない。

と言っわけで1分半、待ってみる。すると、秀吉が復活した。

「・・・シヨウゴよ、言われることに悪い気はしないというか嬉しいんじやが、ワシは一応男じゃからの？」
顔が赤いままの秀吉が言う。

「わかってるさ。ま、それはそうと飯でも食つとしようぜ」
教室に残ってたいつものみんなに声をかける。

「そうだな。よし！食堂にでも行くか」
雄二が立ち上がりながら言う。

「あ、吉井たちも食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別にかまわないぞ」

「・・・（コクコク）」

「あ、あのー！」

突然姫路が声を上げる。

「ん？どうしたの姫路さん」

「その・・・昨日約束した・・・」

最後の方がほとんど聞き取りにくい音量だったが、

「おお、もしか弁当かの？」
それを秀吉が引き継ぐ。

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」
そう言って後ろに置いていたバッグを出す。

「それなら屋上で食べよぜ」

俺は自分の弁当が入ったバッグを持ちながら言う。

「そうか。それなら先に行つててくれ」

「ん？雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買つてくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ち切れないでしょ？」

「わるいな。それじゃ頼む」

「おっけー」

二人は扉まで行く。そして、外へ出ようとしたとき、

「きちんと俺たちの分は残しておけよ」

と明久に言う。

「大丈夫だよ。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くはないはずだ。じゃ、行ってくる」

そう言つて雄二は今度こそ売店へと向かった。

「さて、俺らも行こうぜ」

そうみんなに言つて、俺達は屋上へと向かった。

さて、この状況をどう説明しようか……。

康太が海老フライを素早くとり、口に放り込む。

バタン

ガタガタガタガタガタ

……姫路、どんな作り方をしたらあんな反応のできるおかずを作れるんだ？

「わわっ！土屋君！」

そんな原因の姫路は慌て、持っていた割り箸をとり落とす。

「……（ムクリ）」

おっ、復活……

「……（グッ）」

親指を立てる。姫路に美味かったと伝えたかったんだろう。

だがな……その生まれたての小鹿みたいな足は何なんだ？プルプル震えすぎだろう！

康太の反応をみて姫路が喜んでる間に俺・明久・秀吉が顔を合わせる。

『おい、明久。あれ、どう思う？』

『少なくとも体には悪そうなのがひしひしと伝わってきたよ』

『どう考えてもあれは演技に見えんからな』

『さて・・・、あの弁当をどう処理する？』
きけんぶつ

『僕は正直自信ないかな。食事の回数が少なすぎて胃袋が退化してるし』

『・・・ならば、ここはワシに任せてもらおう』

『正気かいつ！？秀吉！』

『大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのだ』

『ま、俺は自分の弁当があるから頑張ってくれ。二人とも』

『な！？シヨウゴの裏切り者！』

そんな感じで俺達は目だけで会話をしていると、

「おう、待たせたな！へー、これはうまそうじゃないか。どれどれ？」

雄二がやってきて、卵焼きを口の中に放り込む。

パク　ボタン——ガシャンガシャン、ガタガタガタ

二人目の犠牲者発生。これにより、あれの威力が尋常でないことが実証されてしまった。

そんなことを考えてると、雄二が目で語る。

『毒を盛ったな』と。

俺と明久はそれに答える。

『あれが姫路（さん）の实力だ一』

「ちょ！？坂本どうしたの！？」

雄二の後ろから島田が現れ、倒れている雄二に駆け寄る。

「あ、足が攣ってな・・・」

優しいな雄二。姫路の為にそんな嘘までついて。しかし、あれの味はどんななのだろう。ふとした疑問が俺の中に生まれる。危険ではあるが、好奇心の方が今の俺は勝ってる。というわけで、

「じゃ、俺ももらうな」

まず康太の食べてた海老フライを食べる。

・・・うゝむ・・・、確かに美味いかまずいかで言うともまずい領域なのだが・・・、

「別に食えないこともないんじゃないか？」

俺はこの日から姫路の弁当処理班に抜擢された。

結局姫路の弁当を俺一人ですべて食べ終え、みんなで俺の弁当をつつく。何故か秀吉がお茶を執拗に勧めてくる。まあ、あの二人の反応からの優しさだろう。

「そつえば雄二、次の目標だが・・・ってどうしたんだ？」

「い、いや・・・お前の弁当を見てたら吐き気が・・・」

「失礼な。俺の弁当のどこが悪い」
今日は結構会心の出来なんだぞ？

「量だ量！味はすごくいい。これは認める。だが何で弁当なのに重箱なんだよ！しかも5つ！」

「いや、普通じゃねえか？」
確かにいつもより多めだが・・・そこまじやないと思う。

「・・・もういい。お前は昔からそうだったな」

「なんか気になる言い方だが・・・まあいい。それよりも試召戦争の目標だ」

「ああ。次はBクラスを狙う」

「え？Aクラスじゃないの？」
そんなことをいった明久を見て神妙な顔つきになる。

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスに勝てやしない」
ま、それは仕方がないことだな。学年最低と最高じゃレベルの差がありすぎる。俺や姫路はまだいいが、個の力だけじゃ戦争には勝てないからな。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

「クラス単位では勝てないだけさ。一騎打ちにでも持ち込めば勝てる・・・そうだろ？」

俺は雄二に確認するように言う。

「ああ。そうだ」

雄二も肯定する。

「でもどうやって一騎打ちに？」

「Bクラスを使うんだよ」

何のためにBクラスに攻めると思ってたんだ？

「試召戦争で下位クラスに負けた場合の設備はどうなるか知ってるな？」

雄二が明久に聞く。

「え？も、もちろん！」

明久・・・嘘はもつとましなつき方をしような。ばればれだ・・・。

そしたら、姫路が明久に何か言う。

「設備のランクを落とされるんだよ」

どうやら、助け船を出してもらったようだ。姫路は優しいな。

「・・・まあいい。つまりBクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

「そうだね。常識だね」

「なら、上位クラスが負けたらどうなる」

「悔しい」

「ムツツリーニ、ペンチ」

「ややっ！僕を爪切り要らずの身体にする動きがっ」
俺の行動を見て明久は後退する。

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

姫路からの再度援護射撃。明久、もしかしたら愛されてるのかもな。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉する」

「交渉、ですか？」

雄二の言葉に質問する姫路。

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう」

「ふんふん、それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻

め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどねー」

雄二の説明を聞いて納得する明久。さて・・・、

「でだ、明久」

「ん？」

俺の言葉に明久は返事する。

「今日のテスト終わったらBクラスに宣戦布告よろしくな」

「断る。シヨウゴか雄二が行って来てよ」

ふむ・・・、

「なら、ジャンケンが負けた方がいく。これならどうだ？」

「OK。乗った」

かかった！

「だが、ただのジャンケンじゃあ面白くない。と言うわけだ。心理戦もありだ」

「わかった。なら僕はグーを出すよ」

こちらにグーを見せながら言う明久。ふっ、それが死亡フラグだとも知らないで・・・。

「それなら俺は、お前がグーを出さなかったらこの世に生きてることを後悔するようなことをする」

「ちよつ!!!」

なんか明久の声が聞こえた気もする・・・気のせいかな。

「ジャンケン」

「うわああああ!!!」

俺
パー

明久
グー

「決まりだな。逝って来い」

「絶対に嫌だ!しかも字が違う!」

無駄に鋭いな・・・。

「どうして嫌なんだ?Dクラスのと看みたいなことを心配してたり?」

「それもある!」

「それなら大丈夫だ。Bクラスは美少年好きが多いらしいからな」
明久の肩に手を置きながら言う。

「それなら安心だね!」

俺の言葉に唐突に元気になる明久。

「でもお前不細工だしな・・・」
しかし、そこに雄二が突っ込む。

「失礼な！365度何処からどう見ても美少年じゃないか！」
阿呆。

「5度多いぞ」

「むしろ5度じゃねーの？」

「ワシも同感じゃ」

上から雄二、俺、秀吉の順に言う。

「三人なんて嫌いだ！」

そう叫んで明久は校内へのドアへと走っていく。

「とにかく頼んだぞ」

その背中に向けて雄二がそう言い、お昼は解散となった。

1章 第五問 根元！てめーは俺達を怒らせた！ 前篇（後書き）

次回はBクラス戦です。前後篇で終われるように努力はしますが無理だったら前中後篇になるかもしれません。

1章 第五問 根元！てめーは俺達を怒らせた！ 後篇（前書き）

お久しぶりです！さて、今回で根元撃破Ⅱ Bクラス戦終結！あと、
今回もネタで主人公が暴れます。

1章 第五問 根元！てめーは俺達を怒らせた！ 後篇

「・・・言い訳を聞こうか」

午後のテストも無事に終わった放課後。Bクラスへと宣戦布告をしに行き、ぼろぼろの格好になり果てた明久が俺と雄二に言うが・・・

「予想通りだな」

腕を組みつつ当たり前だと言わんばかりの態度で答える。

「くきいー！殺す！殺しきるーっ！」

明久暴走。

「落ち着けよ」

俺の鳩尾への右ストレートが突き刺さる。明久沈黙を確認。

「先に帰るからな」

俺は鞆を肩に引っ掛け背中越しにまだ沈黙している明久へ言う。

「明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝てるんじゃないぞ」
雄二も俺の後に付いてきながらプルプル震えだした明久に言う。

そして俺達は帰っていった。

さて翌日。

「さて皆、総合科目ご苦労だった」

午前中のテストも終え、教壇に立った雄二が教室全体に聞こえるように言う。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺^やる気は充分か？」

『おおーっ！』

雄二の言葉にFクラス男子全員が雄たけびを上げる。いや、モチベーションだけは学年トップだな、このクラス。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希と大空翔吾に指揮をとってもらう。野郎ども、きっちり死んでこい！」

「が、頑張ります」

男子全員の無駄なテンションの高さについていけない姫路が若干引きながらも一歩前に出る。

「ま、せいぜい巻き添えは食うなよ？」

俺も同じように一歩前に出ながら軽く言う。

『うおおーっ！』

姫路、俺の言葉に皆のテンションが更に上がる。それに比例して姫路も引いて行く。

キンコンカンコン

昼休み終了の鐘が鳴る。

「よし、行つて来い！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

雄二の指示に男子は軍隊張りの敬礼とともに返事し、渡り廊下へと走る。

『いたぞ！Bクラスだ！』

『高橋先生を連れているぞ！』

誰かが前方を指差しながら言う。見ればゆつくりとした足取りでBクラスのメンバーが歩いてくる姿があった。人数は十人程度。あくまで様子見ってわけか。

『生かして帰すな！っ！』

Bクラスメンバーの一人の物騒なセリフとともに、Bクラス戦が始まった。

Bクラス	野中長尾	V S	Fクラス	近藤吉宗
総合	1943点		763点	

あゝらら・・・点数の差が激しいな。

『死神だ！他の奴らは雑魚だがこいつだけは無視するな！』

はあ・・・周りの人たち涙目・・・ではなく殺気だっているが嘘偽りない事実だから言い返せない。ドンマイ・・・。

『行くぞ！試獣^{サモン}召喚！』

「はいはい、試獣^{サモン}召喚〜」

そんな気の抜けた声とともに俺の召喚獣が現れる。

さて、今回の姿は、白を基調とした機械的な装甲に覆われ、背中に12枚の青い羽を背負った某自由の名を冠するモビルスーツである。

あ、顔とか一部は露出してるとよ？

Fクラス 大空翔吾 VS Bクラス 複数名
数学 893点 平均160点

『！！！！』

Bクラスのみなさんびつくりな点数だが・・・戦場で硬直するとは愚かなり！

「いつけえー！！！！」

俺の言葉とともに、羽から12個ほどドラグーンが飛び、Bクラスを包囲、および掃射。それに残ったやつは手元にあるビームライフルで撃ちぬく。そして、やられた奴らは地獄^{てっしん}の使者に連れて行かれてしまった。

まあ、なんとも呆気ない終わりだ。しかし・・・やはりというべきか、Fクラスのやつらはかなり苦戦している。ある程度削つてもあんまし意味ねえな。

そんなとき、

「お、遅れ、まし、た・・・ごめ、んな、さい・・・」

息を切らせた姫路登場。野郎の全力疾走にはついてこれなかったらしい。

姫路がきたし、まあ大丈夫だろ。俺はもどろーっと。ここ最近真面目にやりすぎて疲れたし。

「ショウゴも戻るのか？」

後ろから秀吉が走ってくる。後ろでポニーが跳ねている。

「ん？ああ。姫路来たし大丈夫だろ？」

そんな秀吉を見て癒されつつ言う。

「なら、急いで戻るぞ」

「なして？」

「Bクラスの代表じゃが・・・」

「ふむ」

「あの根元らしい」

「ほう・・・あの根元恭二か？」

「うむ」

根元恭二。簡潔に一言で説明するなら『卑怯』。曰く『球技大会で相手チームに一服盛った』とか『喧嘩に刃物は当然^{デフォルト}装備』とかの最低な噂が流れている奴だ。そんな奴だから、

「なんか妨害がある？」

「うむ。雄二何かあるやもしれんからな」

「そつだな。おゝい、明久ゝ！」

俺は戦況を眺めている明久に声をかける。

「なに〜?」

俺の言葉でこちらに駆け寄ってくる。そして明久にも俺達が考えることを教え、一緒にFクラスへと戻る。

「・・・うわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「心底腐ってるのかね」

教室の惨状を見て俺らは三者三様の感想を述べる。口調から順番はわかるだろ?

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」
嫌がらせね……。器の小さいことで。

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

「雄二がそういうならいいけど」

しかし・・・なんか引つかかるような・・・。

「それはそうと、どうして雄二は教室がこうなってるのに気付かなかったの?」

そう言えば。こいつ教室にずっといたはずなのに・・・。

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印のために教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

雄二の言葉に疑問の声をあげる秀吉。

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「それ承諾したの？」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃないの？」

阿呆だな。こいつは。

「姫路以外は、だろ？」

雄二の代わりに俺が答える。俺の言葉でようやく理解したらしい。

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると本番は明日ということになる」

「そうだな。このままじゃ本丸は落ちねえだろうし」

「その時はクラス全体の戦力よりも姫路個人の戦力の方が重要になる」

「だから受けたの？姫路さんが万全の態勢で勝負できるように」

「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合がいい」

俺はそんな明久達の会話を聞きながら思索する。

考える。いくら補給経路を一時的に断つただけに、そんな対等な条件の協定なんか結んでくるか？否。噂通りの奴ならもつと何かあるはずだ……。だが、情報が足らなすぎる。何かこっちの主要な・・・そう、姫路を無力化できる何かがあると仮定できる。しかし、それが何なのか皆目見当つかんが・・・。うつむ・・・。

「んじゃ、雄二、後よろしく」

どうやら明久達は前線へと戻るらしい。

「いてら〜」

「おう、シャープや消しゴムの手配をしておこう。ほら、ショウゴも手伝え」

そう言つて雄二は俺のぶらぶら振つてた手をがしつと掴み、そのままひこずつて準備へと向かう。

「いーやーだー！H A N A S E E！」

「うるさい！どうせ寝るだけだろうが！」

「いいじゃん！最近俺頑張ってるじゃん！」

「お前な、テストの時にも寝てる奴が言うことじゃねえぞ」

「あれはテストで真面目にやったための疲労回復。いつもの睡眠時間が削られてんだよ！」

「ま、黙ってついてこい」

「いやー!!!」

ま、そんなこと言っても手伝わされたんだが・・・。

まあ、逃げられなかったので速攻で雑用を終え、教室で爆睡。起きたら秀吉の顔が目の前にあった。

「ありや、おはよ」

とりあえず、挨拶。

「ああ、おはよう」

「戦争は？」

ぼくとしてあんまし働いてない頭を起こしつつ秀吉に聞く。

「今は協定通りに休戦中じゃ。続きは明日になる」
なんとなく残念っぱい顔を秀吉はしながら言う。

「あれ？てかみんなは？」

頭がはつきりしてきたので教室を見渡してみると、ものの見事に俺と秀吉以外誰もいない。

「お主・・・今何時だかわかつとるか？」

呆れた顔の秀吉。そんなダメな子を見るような目はやめて！

「7時じゃ」

「……」

どおりで誰もいないわけだ……。

「帰ろうか」

「そうじゃの」

沈黙の後、俺達は普通に帰って行った。

翌朝。

「昨日言ってた作戦を実行する」

珍しく早くに登校した俺も含めたいいつものメンバーに対して雄二が言う。作戦？何のことかさっぱりだ。

「作戦？開戦時刻はまだだよ？」

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

「へー何かあったのか？」

「お主は寝ていたからの……」

あ、そうなの。

「まあいい。とりあえず秀吉にはこれを着てもらっ」
そう言っつて鞆から女子の制服をとりだす。えー……雄二って……。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」
いや、構え。お前はそれだから男子として扱われないんだよ。

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらったよ。よかった……。雄二が人の道を踏み外してなくて。」

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……」

雄二から制服を受け取り、ここで着替えようとするが……

「秀吉。お前はここで着替えない方がいい」
俺はそれを止める。

「どうしてじゃ？」

どうやらわからないらしい。

「周りの奴らの目が血走ってる。色々危ないから。特に康太」
言いながら教室を見回す。秀吉もそれに倣う。

「うむ……。何となくじゃが理解した。何故かはわからんが……」

「ま、よろしく頼む」

「うむ」

そう言って、秀吉は教室を出て行った。

「シヨウゴきさ……。ま……」

明久を筆頭にこっちに凶器を持って迫ってくるが、

「あ？」

チンピラ同然の睨み、ついでに殺気。ま、慣れてるやつじゃないと耐えられないくらいの。なんでそんなもの身につけてんのかは・・・まあ、作者がどうにか説明するんじゃない？そのうち。

ま、そんなハプニング的なことがありつつも作戦決行となった。ちなみに俺はそのとき教室で熟睡していた。

「ドアと壁をうまく使っくんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」
秀吉の指示が飛ぶ。

今回、雄二からの指示でBクラスを教室内に閉じ込めろとのことだったんで、現在任務遂行中なのだが、総司令官である姫路の様子がおかしい。何故かは知らんが何にも参加しないように行動しているので、代わりに秀吉が指揮をとってどうにか持たせているんだが・

『死神覚悟！』

「あゝもう！雑魚が！」
人が考えてるときに！

『「試^{サモン}獣召喚！」』

Fクラス 大空翔吾 VS Bクラス 坂本輝彦
古典 751点 142点

今回は青いドレスにとどころ軽装の防具が付いている某はらぺこ騎士王の姿で、手には相手には見えない剣が握られている。

「風よ——吼えあがれ!!」

ストライク・エア

とまあ、風王鉄槌をぶち込んで一撃死。俺がそんなことをすると、劣勢だった左側出入口にいる竹中先生に駆け寄り、何かを耳元で呟く。

その瞬間、すぐに頭を押さえ周りを見た後、

「少々席を外します」

どっかに行ってしまった。まあ、大方ヅラでも直しに行っただろう。はてさて・・・、姫路はどうして動かないんだろうか。

明久も姫路の行動がおかしいと思って聞きに行っているが収穫は・・・あつたな。

姫路の視線の先、そこには根元恭二がなにか手紙のようなものを持っていた。まあ、あれがなんなのかはわからんが、あれをあいつが持っていることで姫路が動けないってことがよーーくわかった。

明久はあれの正体を知っているらしく、表情は笑みを浮かべているが、拳は血が出そうなくらい強く握っている。あれを見ればわかる。あの手紙が大切なものであることが。

ふー・・・、根元恭二、てめーは俺を・・・俺達を怒らせた!!その報いは受けてもらうぞ・・・。

あの後、とりあえずあれを取り返すため、明久と雄二の元へ向かう。

「雄二っ!!」

「うん?どうした明久にシヨウゴ。明久は脱走か?チヨキでシバくぞ?」

「話があるんだ」

雄二のジョークに明久は取り合わない。それだけ、あれが大切なものだとわかる。

「・・・とりあえず聞こうか」

雄二も明久の真剣な様子を見て、真面目な顔で明久を見る。

「根元君の着ている制服が欲しいんだ」

一瞬でグダグダな雰囲気になった。

「・・・お前に何があつたんだ」

「ああ、いや、その。ええと・・・」

話が進まん・・・。

「そこは深く突っ込まないでやってくれ雄二・・・わかるだろ?」

諦めきつた顔をして雄二に言う。俺の顔を見て雄二も同じような顔になり明久の肩に手を置く。

「まあいいだろう。勝利の暁にはそれくらい何とかしてやろう」

「二人とも!!!なんだよその会話は!!!シヨウゴはわかってるでし

よ！！」

やれやれ・・・せっかくグダグダな雰囲気のまま説得に移ろうとしたのに。

「で、それだけか？」

「いや、今回姫路を戦闘から外してくれ」

「理由は？」

「理由は言えないそうだ」

「どうしても外しないとだめなのか？」

「ああ、そうだ」

「頼む、雄二！」

明久が頭を下げる。

「・・・条件がある」

「条件？」

雄二の言葉に明久が頭をあげる。

「姫路が担う予定だった役割をお前たちがやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させろ」

「もちろん！」

「任せとけ」

「いい返事だ」

「それで、俺達はどうすればいい？」

やることがわからねばどうしようもない。

「タイミングを見計らって根元に攻撃を仕掛ける。科目はなんでもいい」

「了解！さて、行くぞ明久！」

やることがわかったので教室の出口へと走る。

「うん！」

明久も返事をして、俺の後についてくる。

「あれ？でもどうするの？」

「それはな・・・場所についてから言う」
作戦を頭の中で整理しつつ答える。

「おい、島田に武藤と君島！協力してくれ！」

俺はちょうど帰って来ていた三人に声をかける。

「どうしたの？」

「何か用か？」

「補給テストがあるんだけど」

三人は昨日から人一倍点数消費が激しく、点数補給をしなければならぬのだが、

「補給テストは中断。その代わり俺に協力してくれ」

「だらしない態度を外に出さないように俺は三人に言う。」

「・・・随分と真剣ね」

「ああ。あの腐れ外道に目に物を見せる」

「何をすればいいの？」

「明久と召喚獣で勝負をしてくれ」

「二人とも、本当にやるんですか？」

Dクラスに召喚獣勝負の立会人として呼ばれた英語の遠藤先生から向かい合っている明久と島田に念を押す。

「はい。もちろんです」

「このバカとは一度決着をつけなきゃいけなかったんです」
互いに指をさしながら遠藤先生に言う。

「でも、それならDクラスでやらなくてもいいんじゃないですか？」
まあ、Dクラスの連中が一人もいなくてFクラスの生徒が集まつて
るとなれば先生も訳が分からないだろうな。

「仕方ないんです。このバカは《観察処分者》ですから。オンボロ

のFクラスで召喚したら、召喚獣の戦いの勢いで教室が崩れちゃうんで」

酷い言い様だ。ま、このくらいやらないと騙すことはできないか。

「もう一度考え直しては」

「いえ。彼女には日ごろの恨みも返しておかないと気が済みません」
これは演技じゃなくてお前の本心だな。

「わかりました。お互いを知るための喧嘩も教育としては重要かも
しれませんしね」

ようやく、遠藤先生から許可が下りた。さて、作戦開始だぞ。二人とも。

「「試獣^{サモン}召喚！！」」

そう言った瞬間、いつもの二人の召喚獣が現れる。

明久は学ランに木刀。

島田は軍服にサーベル。

そして、明久の召喚獣が先に動く。壁を背にした島田の召喚獣へと強く握り締めた拳を振るう。が、避けられて後ろの壁に当たる。

ドンッ！

「ぐっ————うっ！」

フィードバックで明久が拳に痛みが返ってくる。そして、その後何度も拳を振りおろすも、すべて避けられて壁に当たる。
そんなとき、

『お前らいい加減諦めるよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』
壁の向こうから根元恭二の声が聞こえてくる。

『どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？』
雄二の声も一緒に聞こえてくる。

そんな間にも島田に対して拳を振りかぶり、避けられ、壁へと当たる。

『はあ？ギブアップするのはそっちだろ？』

『無用な心配だな』

『そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

『・・・お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ』

『けっ！口だけは達者だな。負け組代表さんよお』

『負け組？それがFクラスのことならもうすぐお前が負け組代表だな』

そろそろ明久の拳にも限界が見えてくる。その証拠に結構大きな血だまりができている。

『・・・さつきからドンドンと、壁がつるせえな。何かやってるのか？』

『さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？』

『けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

『・・・態勢を立て直す！いったん下がるぞ！』

『どうした、さんざんふかしておきながら逃げるのか！』

その瞬間、明久達の召喚獣が消える。

「もういいでしょう。吉井君の傷も大きくなってきましたし・・・。つち！ここでこんなことになるとは・・・。どうする・・・。」

そのとき、

『あとは任せたぞ、明久、シヨウゴ』
しょうがないか・・・。

「んまい棒挫羅末！！」
懷から棒状のお菓子を地面へと投げる。すると、煙幕が発生する。

「さて・・・いつけえー！！」

煙幕で皆が何も見えてない間に、さっきまで明久が殴っていた壁にコインを弾く。

ドゴーーーーン！！

閃光とともに壁が吹き飛ぶ。その衝撃で煙幕も晴れる。いきなりの出来事に全員が固まる。

「遠藤先生！Fクラス大空翔吾が・・・」
その間に根元へと向かうが、

『Bクラス山本が受けます！』
残念なことに足止めを喰らう。その間に根元との間に障害物がたくさんできる。

「は、ははっ！驚かせやがって！残念だったな！お前らの奇襲は失敗だ！」

さて、急に話が変わるが強化の特性について説明する。
各教科にはそれぞれ担当教師がいて、その先生によってテストの結果にも特徴が現れる。

例えば、数学の木下先生は採点が早い。

例えば、世界史の田中先生は点数の付け方が甘い。

例えば、今一緒にいる英語の遠藤先生は、多少のことには寛容で見逃してくれる。

では、保健体育は？

保健体育は採点が早いわけでも、甘いわけでもない。遠くにいる相手に戦闘を仕掛けられるわけでもなければ、豹しやすい先生というわけでもない。

保健体育という教科の特性。それは、教科担当が体育教師であるが
為の――

ダン、ダンッ！

出入り口を人で埋め尽くされ、真夏のように感じる教室に涼を求め

るために開け放たれた窓からロープを伝って二人の人影が飛び込んでくる。

保健体育の特性とは教科担当が体育教師であるが為の――
並はずれた行動力。

「・・・Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ・・・！」

「・・・Bクラス根元恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムツツリイニイーーーーッ！」

俺達奇襲組により、丸裸の根元を守るものは誰もいない。

「――――^{サモン}試獣召喚」

Fクラス 土屋康太 VS Bクラス 根元恭二
保健体育 441点 203点

ムツツリ二の召喚獣は手にした小太刀で根元の召喚獣を一撃で斬り伏せる。

今ここに、Bクラス戦は終結した。

1章 第五問 根元！てめーは俺達を怒らせた！ 後篇（後書き）

次は戦後処理などです。もしかしたらAクラス戦も一気に行くかも？

1章 第六問 戦後処理（前書き）

Aクラスまでいけなかった・・・。

1章 第六問 戦後処理

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

大空翔吾の答え

『 C_6H_6 シリーズなら $C_6H_4Cl_2$ が好きです』

教師のコメント

その補足は必要ありません

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『 $B-E-N-Z-E-N$ 』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室へ来るように。

戦争も無事終了したBクラス。その隅で血だらけの手をさすりながら明久がしゃがみ込んでいた。

「うう・・・痛いよう、痛いよう・・・」

まあ、鉄筋コンクリートの壁に罅入るくらい殴ったら当たり前か。

「あれはお主の作戦か？」

Bクラスにやってきた秀吉が明久に言う。

「ううん、シヨウゴの」

明久は俺の方を見る。

「・・・別にお主じゃなくてシヨウゴがやればよかったと思うんじゃないが」

「・・・」

「・・・」

二人が無言でこっちを見る。

「いや、それは先生も絶対警戒すると思うぞ？俺の点数だと明久がやりあうならもっと別の方法のいいだろうし」

俺の言葉に二人は黙る。まあ、事実だし。

「でもさ、あの閃光みたいなのはなんだったの？」

おっと・・・、そっぴやまだ説明してなかつたか。

「それは今度だ。それよりも今は・・・」
「そう言つて後ろに振り返り、」

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といこうや。負け犬組代表？」

さつきとは打つて変わつておとなしく床に座り込んでいる根元に笑顔を向ける。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓球台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」
俺の横から雄二が出てきて言う。その言葉に周囲にいるF、Bクラス問わず騒ぎ始める。

「落ち着けよ。俺らの目標はAクラス。こんなところがゴールじゃないんだぜ？」

俺のその一言で周りにいた奴らは瞬時に静かになる。

「そうだ。ここはあくまで通過点。だから、Bクラスが条件を呑むのなら解放してやろうと思う」

「・・・条件はなんだ」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」
なんか勘違いしてるのか顔色が悪い・・・。

「ああ。お前は去年から目障りだったからな」

まあ、あんだだけ好き勝手やってりや誰でも嫌いになるさ。

「そこで、Aクラスに試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備に関しては見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「・・・それだけでいいのか？」

「いんや、こつちが本題。これ着て逝つて来い」

そう言つて朝に作戦で使つた女子の制服をとりだす。

「ば、バカなことを言つな！この俺がこんなふざけたことを・・・」

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

反論の声をあげようとした根元を脇へ押しやり、口々に言う。これを聞くとどれだけ酷いことをやってきたかよくわかるな。

「んじゃ、決定」

「くっ！よ、寄るな！変態ぐふう！」

『とりあえず黙らせました』

「御苦労」

Bクラスの一人が腹部になんのためらいもなく拳を打ちこみこつちにサムズアップする。それに俺も答える。その様子に、周りのFクラスはたじたじた。

「悪いけどさ、俺着せ方わかんねえから誰かやってくれない？」

『私がやってあげるよ』

俺の言葉にBクラスの女子の中から一人が出て来てくれる。

「ありがとな、どうせやるなら可愛く着せてやってくれ」

『それは無理。土台から腐ってるから』

俺が言った瞬間に即座に言う。どんだけ……。

「んじゃ、よろ」

根元をBクラスに託し、制服のポケットを探っている明久のところへと行く。

「見つかったか？」

「ええと……たぶんこの辺に……あつた！」

どうやら目当てのものは見つかったみたいだ。

「でもこれどうしよう……」

目的を達した今、この制服に用はない。

「俺に任せろ。それじゃ」

そう言っただけ俺は自分の鞆と制服を持って教室を出る。

帰りの途中に裏庭にある焼却炉に手に持った制服は破棄。ミッシェルコンプルー任務完了。

「たっだいま」

誰もいやしないが、まあ習慣だから仕方が・・・、

「お帰り」

あれ？返事が聞こえたな。リビングにいるらしいな。

「よっ、おひさ」

リビングには神がいた。

「よう、3週間ぶりだな」

こいつは俺が転生してからもちよくちよく遊びに来ている。赤ん坊だったころは話し相手として、俺が一人暮らしを始めてからは飯&おやつを食べに来ている。後ゲームとか。

「いや、他の神のやつらがまたお前の菓子を食いたいって言うたし、ついでにお前の飯が恋しくなったからな。部下に仕事押し付けてやって来たんだ」

そう、なんかこいつが持って帰った菓子を興味本位で食った他の神の奴らがなんか受けたらしく、たまーに作っている。

「そうか。その押し付けられた部下の人は災難だったな。ま、今から作るから待ってる」

鞆をソファの上に投げ、台所へ向かう。

「今日はなんだ？」

「今日は無難にミートスパだ」

冷蔵庫の中を漁る。そして、中から必要な具材をとりだす。

「おゝ、いいね。早くしろよ」

「なら食器類の準備よろしく」

「はいよ」

俺の言葉で神は手際よく準備していく。これだけ見てたら絶対神には見えないだろうな。

そんなことを思いつつも俺も効率よく晩飯と菓子を並立して作る。実はこの家、俺と神によってある程度？の改造が行われている。その最たるものが今使っている台所だ。いつもは普通の家にあるような台所なのだが、俺と神の魔力？のようなものを鍵として調理教室が開けてしまいそうな位の広さに広がるのだ。どこにそんなスペースがあるんだか……。

ま、そんなことを説明している間に晩飯完成。クッキーは後はオーブンで焼くのみ。

「やっとできたか……。背中と腹がくっつくところだったぜ」
神はぐで、とテーブルに突っ伏して言う。

「いや、それはない。てか、基本的にお前らって空腹とかないんじゃないかったか？」

確か神について聞いた時にはそう言ってた気がする。

「いやな、空腹は最高のスパイスっていうじゃん？だからお前の料理を食べる時には俺達にも疑似的な空腹感を感じるようにしてんだよ」

あゝ、そんなに俺の料理は受けてんですか。そうですか。

「まあ、作った方としてはそこまでして食べてくれるのは嬉しいな」

「おゝ、じゃあいただきます」

そう言った瞬間、すごい速度で食い始める。すげーなおい・・・。

「いただきます」

俺はそんな早食いをするつもりはないので、普通の人の速度で食う。

ちなみに量は、二人で給食を作ってる大鍋一杯分といったところだ。食いすぎ？まあいいじゃん♪

食後にはちょうど焼けたばかりのクッキーをつまみつつ、ウイイレで対戦をする。

結果、俺3 - 神2の接戦でした。

神はもう一回だ！と言っていたのだが、急に穴が空いて、その中に引き込まれていった。たぶん部下の人が回収したんだろう。

お疲れ様です。

さて、二日後はついにAクラス戦。どんな展開になるんだろうか・・・。
。。楽しみだ！！

1章 第六問 戦後処理（後書き）

思っているが、この小説の一話の長さはこのくらいがいいでしょうか？それとももっと増やした方が（1万〜2万）いいでしょうか。みなさまのご意見お待ちしております。

Aクラス戦・・・しかし俺の見せ場なし

さて、あれから二日たちFクラスはAクラスとの戦の日を迎えていた。

そんなとき、Aクラスと勝負の内容の話しあいを終えFクラスへ帰る途中、

「ねえ雄二、シヨウゴどうしたのかな？」

と観察処分者であるバカの代名詞、吉井明久はこの場にいる人全員に聞こえるように言う。

「さあな。あいつのすることは前からわからん」

それにFクラス代表である坂本雄二は両掌を上に向け答える。

「もしかしたらまだ家で寝てたりするのかな？」

「・・・あいつだからありうる、と思うのは俺がおかしいのか？」

「ごめん、雄二。僕も否定できないや・・・」

「ま、今はAクラス戦のことだけを考えようぜ」

「そうだね」

さて、二人の話題に上がった少年はというと・・・

「やつば！！遅刻だ・・・ま、いつか。急いだところで間にあわねえんだし」

まあ、真実は当たらずも遠からず・・・といったところか・・・。

「では両名とも準備はよろしいですか？」

Aクラス担任である高橋先生がA、F両代表に声をかける。

「ああ」

「・・・問題ない」

両代表は落ち着いて答える。Aクラス代表の方は少し目が辺りをきよろきよろとしていたが・・・。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「あたしから行くよっ」

Aクラスからは木下優子が、

「ワシがやろっ」

Fクラスからは木下秀吉が前へと出る。

「あ、秀吉」

「なんじゃ？姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

「ふーん……。まあいいや。その代わりにちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ワシを廊下へ連れ出してどうするんじゃ姉上？」
その言葉を最後に木下姉弟は廊下へ。

『姉上、勝負は——どうしてワシの腕を掴む？』

『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがCクラスの人達をブタ呼ばわりしていることになってるのかなあ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して—

——あ、姉上っ！ちがつ……。！その関節はそっちには曲がらなっ……。！』

ガラガラガラ

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」

にこやかに返り血を拭いながらFクラスの方へ言う。

「い、いや……。ウチの不戦敗で良い……」

それに対し、引き攣った笑みを浮かべながらFクラス代表は答える。

「そうですか。それではAクラスが一勝、と」

高橋先生はノートパソコンを操作する。すると、壁にある大きなデ

イスプレイに結果が表示される。

Aクラス	木下優子	V S	Fクラス	木下秀吉
生命活動	W I N			D E A D

そのころの翔吾

「行つてきまゝす」

ようやく、出発。まったりした足取りであるが……。彼が学園へ着くのはもうちょい先になりそうだ。

「では、次の方どうぞ」

『わたしが出ます。科目は物理でお願いします』
Aクラスからは佐藤美穂さん出撃。

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？僕！？」

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出させてこと？」
笑みを浮かべながら明久は雄二に言う。

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前
の本気を見せてやれ」

雄二も同じように笑みを浮かべながら言う。

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『いつものジョークだろ？』

Fクラスから声が飛ぶ。

「吉井君、でしたか？あなたまさか・・・」

「あれ、気づいた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃ
あいない」

「それじゃ、あなたは・・・！」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕――

明久はそこで一息つく。その様子に全員が息をのみ・・・

「――左利きなんだ」

ずっこけた。

Aクラス	佐藤美穂	V S	Fクラス	吉井明久
物理	389点	V S	62点	

そんなとき、

「済まん遅れた！！でもなんで秀吉が廊下で倒れてんだ・・・てどうした？」

Aクラスの扉が勢いよく開くと同時にシヨウゴが現れる。さて、主人公も帰ってきたことで視点をシヨウゴ視点に戻しますね？

さて、Aクラスの扉を開けたまでは良かったんだが・・・皆の視線が痛い！！

「お前どうしたんだ？もう三回戦前だぞ？」

雄二は周りの視線を無視してこっちに来る。しかし、さすがに寝坊とは言えないよな・・・。

「悪いな、実は・・・来る途中に困っているお年寄りがいて「あゝわかったわかった。どうせ全部夢の中の話だろ？」少しは聞けよ！！」

「どうせ嘘なんだろう？」

「・・・まあそうだが」

「まあいい。詳しい話は後からでもいいだろう」

どっちにしろ制裁は免れんか・・・。

「話は終わりましたか？それでは三回戦を始めたいと思います」

「・・・(スック)」

どうやらこちらからは康太が出るらしい。

「じゃ、ボクが行こうかな」

あちらさんは・・・だれ？

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

ふゝん、まあこれから接点があるかわからんし覚えなくてもいつか。

「教科は何にしますか？」

「・・・保健体育」

まあ、康太はそれしかできんからな・・・。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

あの・・・工藤だったか？転入してきたからか康太の実力を知らないらしいな。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？・・・キミとは違って、実技で、ね」

??実技・・・体育・・・スポーツ？

「そっちの・・・吉井君だっけ？よかつたらボクが保健体育を教えてあげようか？もちろん実技で」

「フツ。望むところ——」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

いや、別に明久もスポーツはやると思うんだが……。
ていうか、なんでそんなに死ぬほど哀しそうな顔をしてるんだ？

「ならそっちの遅れてきた、シヨウゴ君だっけ？キミは？」
ふむ……、

「俺は別にサッカーでもバスケでもバレーでも何でもばっちこいだぞ？」

『は？』

あれ？どうしたんだ全員そんな顎が外れそうなほど口を開けてさ。

「……そういえばこいつはこんなやつだった」

なんだ？雄二のやつ。額に手を当てながらため息をつきやがって。
俺の何が悪いんだ？

「そ、それでは召喚を開始してください」

高橋先生の言葉でみんなが元に戻る。

「は、はい。試獣^{サモン}召喚つと」

「……試獣^{サモン}召喚」

二人に似た召喚獣がそれぞれの武器を手に持って出現する。康太はBクラス戦のときと同じで小太刀の二刀流。一方工藤は巨大な斧を持っていた。見るからに破壊力がありそうな武器だ。
さて、お互い腕輪をしているが……どうなるかな？

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

笑みを浮かべながらそういうと同時に工藤の召喚獣が駆ける。Aクラスの名は伊達じゃないらしく、Fクラスの奴らじゃ出せないようなスピードだ。

「それじゃ、バイバイ。ムツリーニくん」

その言葉と同時に斧を振るう。が、

「・・・加速」

康太の召喚獣の腕輪が光った瞬間、その姿がブレた。

「・・・え？」

その光景に工藤は戸惑った表情をする。まあ、いきなり相手の召喚獣が射程外に移動してたら当たり前か。

「・・・加速、終了」

ぽつりと康太は呟く。

一拍置いて工藤の召喚獣の全身から血が噴き出す。正直スプラッタだよ・・・。

Aクラス	工藤愛子	V S	Fクラス	土屋康太
保健体育	446点		572点	

おゝ、康太のやつ頑張ったな。

「そ、そんなこのボクが・・・!」

あゝらら・・・。相当ショックだったみたいだな。だが俺のテストの点見たらどうなるんだろ？

「これで二対一ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ！私ですっ
こちらからは姫路。」

「それなら僕が相手をしよう」
あちらは・・・久保？だったけ。

「やはり来たか、学年次席」
隣の雄二が言う。へへ、まあ、なんかメガネかけていかにも優等生
！って感じはするけどさ。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「ちよつと待った！何を勝手に――」
久保の言葉に明久がクレームをつけようとしていた。
あれ？さっき康太が決めたんなら今度はあちらさんじゃ？
うん、わかんね。

「構いません」

その明久のクレームを止める姫路。それだけ自信があるのかな。

「それでは・・・」

高橋先生が操作し、二人が召喚獣を召喚。そして――
瞬でカタがついた。

Aクラス 久保利光 VS Fクラス 姫路瑞希
総合科目 3997点 4409点

『マ、マジか!?!』

『いつの間にこんな実力を!？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!』
おゝ、すごいな。学年主席と同等とは……。

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……?
」

「わたし、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

おゝ泣けること言うねえ。でもさ、姫路。基本このクラスって人の不幸の為に一生懸命なだけだと思っるのは俺だけか?

「Fクラスが好き?」

「はい。だから頑張れるんです」

「これで二対二です」

あれ、さっきまで無表情を貫いてたのに揺らいでるねえ……ま、Fクラスがここまで追い詰めるとは思ってなかったんだろうな。

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

さて、トリは翔子か……。当たり前だが。ん? こっちを見てんのかね。

そう見えたので軽く手を振ってみる。すると、翔子も小さくだが振り返す。それを見たこの場の全員は目を見開き、その振られている先の方——つまり俺の方を見る。

「どうしたんだ？みんな」

みんながこっちを見る理由が意味不明だ。

「シヨウゴも霧島さんの幼馴染なの？」

明久がその場の代表として聞いてくる。

「ああ。言ってなかったっけ？」

「総員狙えっ！！！」

『おう！！！！』

明久の一声で全員カッターを構える。

「・・・やるのか？」

前みたく、殺気をぶつけてみる。それだけで動きは止まる。

「ほら、これから代表戦なんだし応援してやれ。この一戦で決まるんだぞ？」

殺気を消してから全員に言う。まあ、一部気絶したりしてるんだが。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室へ向かって下さい」

諸々の準備をして戻ってきた高橋先生が言う。

「・・・はい」

「じゃ、いつてくるか」

「頑張れよ、雄二」

俺は拳を前に突き出す。

「任せろ」

同じように雄二も突き出し、俺の拳にぶつける。

「皆さんはここでモニターを見ていてください」

高橋先生が機会を操作すると、視聴覚室の様子がディスプレイに映し出される。

『では、二人とも不正行為をしないように。始めてください』
日本史担当の飯田先生の言葉とともに二人は鉛筆を走らせる。

「吉井君、いよいよですね・・・！」

「そうだね、いよいよだね」

「これであの問題がなかったら坂本君は・・・」

「あの問題ってなんだ？」

二人には悪いが質問する。一応記憶の片隅あたりに心当たりはあるんだが・・・。

「あ、そう言えばショウゴはいなかったから知らないか。えっとね、雄二が昔霧島さんに間違えた答えを教えたことがあるんだって。それが「いや、それに関しては心当たりがあるからいい」そう？」
「やっぱりあの問題か・・・。悪乗りして意図的に教えたが・・・それが今回の助けになるとは。」

次の（ ）に正しい年号を記入しなさい

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

さすが小学生レベル・・・明久でも解けそうくらい簡単だ。

（ ）年 鎌倉幕府設立

（ ）年 大化の改新

あ・・・。

「よ、吉井君っ」

「うん」

「これで、私たち・・・！」

「うん！これで僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『うおおおおおー！』

教室を揺るがすような歓喜の声。

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

Aクラス 霧島翔子 VS Fクラス 坂本雄二

97点

53点

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

1章 最終問 第一回試召戦争終了！

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室に雪崩れ込んだFクラスに高橋先生の厳しいお言葉。

「・・・雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二を見下ろしながら翔子は言う。

「・・・殺せ」

「いい覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

雄二にとどめを刺しに行こうとした明久を姫路は抱きついて止める。

「だいたい、53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと――」

「いかにも俺の全力だ」

開き直ったか？雄二よ。

「この阿呆があーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

いまだ暴れる明久に島田も止めに入る。

「それについて否定はしない！」
いや、否定くらいしろ。

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ!」

「くっ!何故止めるんだ姫路さんに美波!このバカには喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに!」

マジで息の根を止める気なのな、明久のやつ。

「それって体罰じゃなくて処刑です!」

うん、姫路の言うとおりだ。

「・・・でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

お前酷いな。せめて、足搔け。

「・・・ところで約束」

は?何の?

「・・・!（カチャカチャカチャ!）」

おうっ!?!なんでそんなにカメラを準備しているんだ!?

「わかつている。何でも言え」

「・・・それじゃあ――」

翔子は一度姫路に視線を送り、こっちに歩いてくる。で、俺の目の前に来て小さく深呼吸。

「・・・シヨウゴ、私と付き合って」

シーン

辺りが沈黙で包まれる。ていうか、どういうことだ？

一度明久を見る。あいつも空いた口が塞がらない、といった様子。その他この場にいる一人を除いて同じ様子だ。

で、その例外である雄二はなんか笑いをこらえている。あれ？

「さて翔子。お前雄二のことが好きだったんじゃないかったか？」
あの時から今までそう思っていたんだが・・・。

「・・・あの時助けてくれたのがシヨウゴだって最初からわかってた」

え？ばれてたの？ちゃんと変装していたんだけど・・・。

「・・・髪」

あ・・・。

「そういうことが・・・」

今までばれてなかったと思っていた俺はいつたい・・・。

「・・・そういうこと。だからシヨウゴ、今からデートに行く」

「えー、今から？拒否権は？」

「・・・ない。約束だから。早く行こう」

そう言っつて、翔子は俺の襟をつかみ、引きずる。

「わっ！ちよっ！首締まる！ー！」

翔子の手にタップするが、そのまま無視され引きずられていった・・。

SIDE三人称

ショウゴが翔子に連れていかれて皆がまだ正気に戻っていないとき、その空気を破るものが現れた。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

浅黒い肌、筋肉で覆われた強靱な肉体、短髪。みんな大好き死刑執行人、にしむ——鉄人先生だ。
ショウナ
エクスキュー

「あれ？西村先生。僕らに用事ですか？」

Fクラスからバカの代名詞、吉井明久がいち早く復活して鉄人先生に聞く。

「ああ。今から我がFクラスの補習についての説明をしようと思つてな」

その言葉に復活しかけていたFクラスの面々はまた固まる。

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年死に物狂いで勉強できるぞ」

・
・
・
・

・ ・ ・

『なにいつ！？』

Fクラスの男子全員が悲鳴をあげる。

まあ、鉄人は『鬼』の二つ名をもつほど厳しい教育を行う先生である。そんな先生が担任になるとなれば、悲鳴も当たり前というものだ。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力がすべてではない』と言っても、人生を渡っていくうえでは強力な武器の一つなんだ。すべてではないからといって、ないがしろにしているものじゃない。吉井。お前と坂本、それに大空は特に念入りに監視してやる。なにせ開校以来初の《観察処分者》と《A級戦犯》だからな」

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「そつだ！俺達は楽しい気ままな学園生活を送ってやる！」
吉井と坂本はここにいたらシヨウゴも言うだろうなと思いつながら宣言する。

「・・・お前らには悔い改めるといふ発想はないのか」
ため息交じりに鉄人は言う。
シヨウゴならこうだろう。

「え？悔い改める？ナニソレオイシイノ？」
と。そしてこの場にいる全員の総意である。

「とりあえず、明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやるわ」

「さあ、アキ。補習は明日からみたいだし、今日は約束通りクレープを食べに行きましょうか？」

「え？美波、それは週末って話じゃ・・・」

「だ、ダメです！吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ！？姫路さん、それは話題にすら上がってないよ！？」

両の手を姫路、島田から引つ張られる吉井。彼は今、これらのことから自分の命をどうつなぐか必死に考えていた。

周りのFクラス男子はその両手に花な状態にもの凄く殺気だっていたが・・・。

「に、西村先生！明日からと言わず、補習は今日からやりましょう！思い立ったが仏滅です！」

「『吉田』だ、バカ」

「そんなことどうでもいいですから！」

「うーん、お前にやる気が出たのは嬉しいが――」
そう言つて、鉄人は吉井、島田、姫路の順番に三人を見て、

「無理することはない。今日だけは存分に遊ぶといい」
ニヤニヤとした笑顔で吉井に宣告する鉄人。これぞまさしく死刑執行人。

「おのれ鉄人！僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待つ！」

「斬新な告白だな、オイ」

「アキ！こんな気だけやる気を見せて逃げようったって、そうはいかないからね！」

「ち、違うよ！本当にやる気が出ているんだってば！」

その言葉が本当だったとしても日ごろの行いから信じてもらえない吉井。哀れ……。

「吉井君！その前に私と映画ですっ！」

「姫路さん、それは雄二じゃなくて僕となの！？」

まあ、この後吉井には色々難が訪れたりするのだが……頑張れ。

1章 最終問 第一回試召戦争終了！（後書き）

さて、ようやく1巻の部分終了ですね。長かった……。これから
はもっと早く更新しよう。

次回なんですが・・・どうしましょうか。一度バカテスから離れる
んですが、その間に幕間入れた方がいいですかね？

翔子とのデートとか。

まあ、もしよかったら感想で意見を送ってください。
それでは。

アンケート（本編じゃないので注意！！）

後二ヶ月で1年放置・・・マジですんません。

で、今回は原作のところに書いてある『BLACK CAT』をどうするか。ということです。

一応展開は考えてあるんですが、バカテスメンバーにブラックキャットのキャラが入るのはどうか。と思う人もいるでしょうから今回アンケートをとることにしました。

てなわけで、

1 混ぜてもいいぜっ！

2 ふざけんな！バカヤロウ！

3 こんなんでしょうか？

の三つでお願いします。ちなみに3の場合、何をどうするかまで書いてください。

期限は1ヶ月前後。作者の都合で伸びたり縮んだりするかもしれませんが。なにとぞよろしくお願いします。

閑話　こんな過去があっただよ！（前書き）

本編ではなくて過去編。流れだけ考えてセリフは適当に考えた結果がこれだよ……

閑話　こんな過去があっただよ！

これは俺たちがまだ小学生5年生だったころの話だ。

水無月小学校の放課後。その中の教室に3人の生徒が残って作業をしていた。

「雄二ー暇ー」

とか言いつつ雄二には目を向けず下を向いて何かをしている、髪を長く伸ばした少女にも見える少年、大空翔吾。

「ならお前の手にあるそれはなんだ？」

それに対し、額に青筋を浮かべながらも手元にあるものをテキパキ片付けていくのは将来のゴリ・・・もといFクラス代表、坂本雄二。

「・・・」

そんな二人を無言で見つめるショウゴほどではないが髪を長くのばし、リボンで前髪をあげている霧島翔子。

そんな三人は今宿泊学習のしおりを作成するべく残っていた。

「そりゃ雄二、ゲームに決まってるだろ・・・あつ！またこいつ抜かれやがって。雑魚すぎるな」

そう言つてショウゴはゲームの電源を切る。

「お前しおりは？」

雄二は全く進んでいないショウゴのしおりを見る。まだ一つも手を付けた様子はない。

「あ？こんなんさ・・・あらよつと」

シヨウゴはそう言いながら紙に手を伸ばすと2秒ほどで数部できあがる。

「は・・・？」

そのあまりの光景にびっくりな雄二。

「シヨウゴ・・・すごい」

対して翔子は純粹にシヨウゴに尊敬のまなざしを向ける。

「このペースでやればすぐ終わるだろうし・・・ってもうチョイで下校時刻か」

ちなみにこの作業を始めてすでに2時間程経っている。

「お前なあ・・・」

はあ、と雄二がため息をつく。

「ため息をつくと幸せが逃げるぞ？」

「誰のせいだよ。誰の……」

とりあえず、今ある半分をぱつと終わらせる。どうやら翔子も残ってるみたいだし俺も残して明日一緒にやろう。そう思ってシヨウゴはやり終わった後は机にへばりついて寝ていた。

帰り道。いつもシヨウゴらと一緒に帰ってる翔子は今日は時間も遅いので一人で帰っていった。故に今一緒にいるのは雄二とシヨウゴのみ。

二人が並んで歩きながら話す内容は勉強などの話。もっとも、小学

5年生がやるものではなく中学校在学程度のレベルの内容の話だが、そんなこんなで今日も二人は帰っていたら、

「おい坂本お前頭いいからって調子に乗ってんじゃねえのか？」

今日は何か上級生が3人いた。最近たまにちよっかいをかけてくる奴らだ。理由が模試でいい点をとったから……アホらしいことこの上なさすぎる。

「お前俺らの方が年上なんだからもつと敬えよ」

「ああ？なら年上らしいことをしてみろよ。俺らよりも1年長く生きてる分賢いはずだろうが。それで俺に負けるってことはお前らが怠慢をしてたってことだ。そんな奴らをどうして敬おうと思うか。いやない」

こういう手合いは中途半端に抵抗するよりも徹底的に叩きのめした方がいい。シヨウゴはそんなことを思いながら指をパキパキと鳴らす。外見は美少女。学校での評価は平凡なシヨウゴ。しかし彼は本気を出してないだけなのだ。そのことを知っているからこそ雄二はシヨウゴと付き合い、翔子とも付き合っているのだ。

そして、雄二はシヨウゴがどんな奴かを把握している。今は背中しか見えないがきつと顔には嗜虐的な笑みが浮かんでいることだろう。

雄二が後ろで頬を引くつかせていることを知らずにシヨウゴは3人に近づき、耳元でボソボソソツと何かをつぶやく。それと同時に3人は顔を真っ青にして、

「く、くそっ！覚えてろよ！！」

どこの小悪党だといったくなるような捨て台詞を残し、走り去っていった。それを見届けることなくシヨウゴは雄二の方へ振りかえり、

「じゃ、帰ろうぜ」

と雄二にいった。雄二としては今さっきなにを言ったのかが果てしなく気になるところだが、何となく本能的な部分がそれを拒否していた。なんか……聞いたら後戻りできないような気がする。

そんな感想を抱き、結論は触らぬ神にたたりなし。ということスルーを選択。なにもなかったかのように雄二はその後振る舞って家路へとついた。

翌日の放課後。雄二は図書室へ本を読み、シヨウゴと翔子は昨日の日記の続きをやる為教室に残っていた。

「……ねえシヨウゴ」

パチン、パチン

「なんだ？翔子」

カチカチカチ

「今何やってるの？」

パチン、パチン

「ん？サッカー……っと、そこだっ！！」

ゴーーーーール……！ここで試合終了！FCパーセル、やりました！

そんな声がシヨウゴと翔子しかない教室に響き渡り、机の陰でやっていたゲームをシヨウゴは鞆へとしまった。

「よしっ、翔子はどこまで終わった？」

んっ、と右腕に左手を当てて伸びをしながらシヨウゴは今の進行状況を翔子に聞いた。

「あと少し」

見れば初めにあった量の1/5にまで減っていた。後10分程度あれば終わることだろう。

「そっか。ま、俺としたら……」

しゅぱぱぱっ、と残像が見えるほどのスピードでシヨウゴの手が動く。5分位だろうか、残っていたしおりは全てなくなっていた。

「やっぱりシヨウゴ達はすごい」

昨日とは違い、翔子はシヨウゴの早業を見ながらも手を進めていたのでそれからものの数分で終わらすことができた。

「よし、じゃあ届けに行くか」

できたしおりを全部シヨウゴが持って翔子にいう。

「わたしも持つから貸して」

全部持たせるのは悪い気がしてシヨウゴから少しもらいうけようとするが、

「翔子はあれだ。今日の日直の日誌を持ってかなきゃいけないだろう？」

そう言ってシヨウゴは渡さない。というか日誌はそんなにかさばる

ものじゃない。翔子はそれから考え抜いた結果、

「シヨウゴは優しい……」
そんな結論を出した。

「そんなことないさ」
それを聞いたシヨウゴはなんでもないかのようにそう言って教室のドアの方へと進む。

「……ありがとう」
その背中に小さな声で翔子はそう呟いた。

「おい、行くぞ」
見ればすでに教室からシヨウゴは出ようとしているところだった。

「うん」
机の上の日誌を手に持ち、翔子はシヨウゴの方へと駆けていった。

職員室へ無事しおりと日誌を届けてから鞆をとり、シヨウゴと翔子は教室へと向かう。その途中、

「トイレ行ってくるから先行っててくれ」
シヨウゴは翔子にそう言ってだーっと駆けていった。シヨウゴの言葉にちよつと顔を赤くした翔子だが、シヨウゴに言われた通り教室へと向かうことにした。

「ふう……」

じゃーっという水の流れる音をバツクに手をハンカチで拭きながらトイレから出てくるシヨウゴ。翔子が待っているだろうから早めに行くかと思い、教室へと向かおうとしたのだが、

『やめてっ！』

『うつせーな！』

『おらおら！』

なにやら嫌な感じの声がたくさん聞こえてくる。曲がり角から見ると、教室のドアの陰には雄二がいた。なにやら悩んでいる様子。先ほどの声と雄二の様子から事情を把握したシヨウゴは上の階へと続く階段へ向かっていった。

どうする……。教室のドアの陰から中の様子を見ながら雄二は葛藤する。自分のせいで翔子は酷い目にあっている。感情では助けに行きたい、と思う。だが、逆に6年生を3人も相手になんかできるわけがない、という恐れもある。自分では決められない。だからこそ雄二は思う。早く教師でも何でもいいから助けを呼べと。そうすれば自分が職員室にまで走って事情を伝える。そうすれば皆ハッピーエンドじゃないか。

そして翔子は雄二の願った通りに助けを求めた。

「助けてっ！シヨウゴ！雄二！」

「何やってんだろうな俺……」
翔子の言葉を聞いたかと思えば6年生と翔子の間に立っていた。しかし、

「こいつ震えてやがるぜっ！」
ぎやははと生理的に受け付けそうにない笑い声をあげて雄二を笑う。雄二はそれを無視して、

「翔子、先生を呼んで来い」
後ろでしゃがみ込んでいる翔子にそう言う。この状況で先生が来れば余裕でこちらの勝利。それまで俺が耐えてさえいれば……

雄二がそう思ったとき、

「とうっ！」
上の階から誰かが入ってきた。命綱もなしの馬鹿げている状態で。その人物は長い艶やかな黒髪を持っていた。背は自分と同じか低い程度。そして一番目を引いたのは……

「なんでナマハゲ……？」
秋田県男鹿市の名物、ナマハゲ。『悪い子はいねがー』と辺りを闊歩し、子供たちを恐怖のズンドコに陥れる架空の生物だ。多分ちびっこにとってナマハゲとか獅子舞って絶対怖いものだと思う。というかこの前獅子舞に従兄弟泣いてたし（実話）。

まあそんなことはさておき。それらの外見から雄二は答えが簡単に導き出された。こいつショウゴじゃねーか……。
だがしかし。どういうわけかお面をかぶっている。ならば本名は出さない方がいいのだろう。そう思って雄二は何も言わなかった。

「一つ人の世の生き血を啜り」

カツンとコンクリートの床に足音が一つ響く。

「二つ不埒な悪行三昧」

二つ目。6年生は逃げ出したい気持でいつぱいだが、一応後ろには雄二がいる。何をされるのかわからないという恐怖から彼らは動けなくなっていた。

「三つ醜い浮世の鬼を

退治してくれよう桃太郎」

「つてお前もも太郎関係ねえっ!!」

どうしてもその言葉に雄二はツツコまずには居られなかった。

「素直に『悪い子はいねがー』というよりはましだと思ったんだ」
それにかっこいいし。そう付け加えるナマハゲ（中身ショウゴ）は言う。その様子に雄二は頭を抱えて現実逃避をしたくなった。

「ま、それは置いといて」

そう言いながらナマハゲは目の前に箱があるかのように両手を向かい合わせに出して、それを右の方へおく動作をする。

「そこなお二人、職員室で先生をよんでいらっしやうい」

いらっしやういの部分で前髪を掻き揚げる動作をするナマハゲに軽く雄二は殺意が湧いたがその言っていることは事実。そのまま従うことにする。雄二は翔子の手を引いて教室を出る。その間も6年生はナマハゲの方を見たまんま固まっていた。

雄二は教室のドアの辺りまでついたとき一度立ち止まり、

「お前……ケガすんなよ」

ぶつきらばうにそう言い放ってから職員室の方へ駆けていった。その様子にナマハゲの中でシヨウゴは微笑を浮かべる。そしてそのまま人差し指を前に突き出し一言。

「さあ、お前らの罪を数えろ」

「というのが翔子がシヨウゴに惚れた理由だ」

Fクラスの卓袱台を集めてその周りを囲いながら雄二は周りのいつもつるんでいるメンバーに言う。しかし、この中にシヨウゴはいない。もしいたとしたら黒歴史とか言ってシヨウゴは全力で止めようとしただろう。

「そんなことがあったんだねえ」

「というかシヨウゴはなんでナマハゲのお面を持ってたの……？」
感想として明久はシヨウゴの素直に翔さんの意を込めていい、美波は自分が思った疑問点を聞く。

しかし、その理由はいまだ闇の中である。

「でもお二人ともかつこよかったです」

両手を目の前で組んでほわほわっと姫路は言う。確かに雄二はカッコ良かった。だがシヨウゴはカッコ良かった……か？

「ちなみに雄二にも霧島にもばれておったのか？ ショウゴの正体は」
「ああ。お面をしてたってことはばれなくなかったってことだろうからな。そつとおこうつて翔子と決めたんだよ」
雄二の過去話にそれぞれ感想を言い合っていると、何やら廊下から走ってくる音と、叫び声が聞こえてくる。

『翔子！あぶねえ！』

『なんで逃げるの？』

『せめてその手の中にある物騒な物がなければ抱きしめでも何でもするわ！』

『そう』

『あれ？全部捨てたのか？』

『抱きしめて』

『あ〜う〜……』

『……いー』

ずるずるずる……

Fクラスにいたものは気まずい雰囲気にも包まれる。いや、いつもの様子なんだけど……ねえ？さっき良い話を聞いたばかりなのに、今ではワイワイハナシダナー程度になってしまっていた。

まあでも、それでもこの場にいる全員は思う。

『
平和
だ』

閑話　こんな過去があったんだよ！（後書き）

おまけ

ナマハゲで登場する前日。

「秋田県ではこのようにナマハゲが闊歩する様子が街中で見られます……」

テレビに流れるご当地番組。それを見て、

「ナマハゲのお面作るか」

そして授業中に作り、事件へとつながる……

なんて裏設定は考えてませんよ？考えてませんからね！！

BLACK CAT。本編に出さない方がいいという方がいるんださまいかなあ……でもだせるイベント出し……うがー！！

あ、次回の本編に（予定では）雄二の妻候補を出そうかと思っています。なんか良いキャラあつたら感想にどうぞ。なければ作者が適当に考えます。

では次回もよろしくです！

え〜と本当にすみません……本編じゃないです

アンケート取ったんですが、あれです、本編見直したら別作品介入なしでやったらおかしい点が生まれます。別に設定を変えてもいいんですが、その場合修正に結構時間がかかってしまいます。それでもよろしければ介入なしに致しますが、どうでしょうか。さつさと進めてほしい人は1を、時間がかかってもいいから修正してほしい人は2を選んで感想へどうぞ。

なお、これに関して感想がない場合別作品介入の形で考えます。期限は一週間です。よろしく願います。

アンケートに答えてくださった方々、本当に申し訳ありません……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4025j/>

バカとテストと召喚獣～第2の人生を歩むことになった少年～

2011年8月12日17時53分発行